
戦国の魔術師

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国の魔術師

【Nコード】

N0600Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

*魔法の存在する戦国時代を舞台にした、架空戦記物です。

主人公が飛ばされた世界、そこは

魔法が存在し、女性大名が天下を賭けて争う

パラレルワールドの戦国時代だった。

その世界で最速の魔術師となった主人公は

織田家と協力関係を結び、元の世界に戻る術を探す。

第一章 第一部 黒衣の魔術師

「……ぬうつつ！ おのれ『黒衣の魔術師』め！……者どもっ！
怯むな！ 所詮、奴は魔術師。詠唱中に斬りつければよいのだ！
一斉に斬りかかるのじゃ！」

豪華な屋敷の奥深く。松明により煌々と照らされたざつと二十畳はある広い部屋のさらに奥で、厚い人垣に幾重にも守られた中年の男、ス波義銀が吼える。

「応っ！」

それに野太い声で応えた周囲の兵士たちが、白刃閃かせ僕のほうへ殺到してくる。そういやこの時代、もはや名乗りを上げての一騎打ちは廃れてたっけな。……ま、それは僕の知っている歴史のことだから、この世界に当てはまるかどうかは知らないけど。

カチリ

僕の右手がコートの中にもぐりこみ、スイッチを押す。キュルンと、耳慣れた百倍速の高速言語が紡ぎだされる。それは前へと向けた左手を伝い、白銀の波動へと形を成し目の前に迫っていた兵士を数名、轟音とともに薙ぎ倒す。

一番単純な攻撃魔法、『魔道波』だ。魔力を直接叩きこむだけの単純な魔法だが、地水風火、いわゆる四大精霊の力も、聖属性、闇属性の力も借りる必要がないため、僕にとっては詠唱時間がほとんど0に等しく、極めて使い勝手がいい。

「弓手隊。構えっ！！」

っと。こっちの兵士はおとりだったか。

目の前の徒歩武者に対応する僕から見て左手、月明かりに照らされた広い庭に、いつの間にか整列した弓手隊が指揮官の号令の下、一斉にこちらへ向けて弓を絞る。……なかなか考えられているじゃないか。ちよつと見直したよ。

「ふははははっ！ 油断したな『黒衣の魔術師』よ！ 『防御結界』が切れかけておるぞ！ その状態でこの数の弓矢を防げるかなっ！？」

義銀が高笑いを上げる。

……知ってます？ そういつの、死亡フラグって言うんですよ？
「なるほど。目の前の兵士に気を向けさせておいて、その隙を突くように庭から弓手による一斉射撃。なかなか考えられた戦術です。……けど効果のほうはどうでしょう？ 試してみてはいかがですか？」

「この期に及んで命乞いしない、その姿勢は認めてやろう。……射よっ！」

十を超える矢が空気を裂いて僕に襲い掛かる。が、『身体能力向上』の魔法を帯びている僕にとって、その全てを回避するのは容易い事。サービスで二、三発当たってやつても、大した怪我にもならないのはわかってはいるが、それでもやっぱり痛いものは痛いので素直に回避しておく。

「なっ……！？」

「……これで終わりですか？ じゃあそろそろ……」

確信していた勝ちをあつさりと覆されて絶句する義銀に向け、さつさと仕事を終わらせるべく、ゆっくりと歩き始める僕。

「射よっ！ 射よっ！ この距離で何度もかわせるものではないっ

！ 射よっ！」

義銀の絶叫に煽られるように、再び迫る弓手隊の攻撃。ああもう、めんどうだなあ。

カチリ

きゅいん…… という起動音とともに、僕を半円状に覆う防御結界が再発動される。この結界は一定時間、一定の強度で自分に向けられた物理及び、魔法攻撃を防ぐ聖属性魔法だ。時間とともに効果が薄れ、また結界を形成する魔力の強度以上の攻撃を受けると消滅するが、たかが十数本の弓矢程度で崩れるものではない。…… 本来であれば、熟練された魔法使いでも二分弱程度の詠唱時間が必要となる魔法である。僕にとっては一秒未満だけど。

僕に向けられた幾つもの矢は、それを貫くことができずに全て叩き落される。その光景に呆然とする弓手隊の指揮官を、他の兵士ごとまとめて魔道波で吹き飛ばし、再び義銀と向き合う。

「ばかな……！ 防御結界を一瞬で展開することなど出来るはずが……」

「それができるから、『黒衣の魔術師』は恐れられているのですよ。……ま、とにかくそろそろ素直に武器を捨てて……」

降伏を促す僕の声は、今度は右から聞こえた轟音によって遮られた。

漆喰の壁を力任せにぶち抜き、瓦礫の中から3メートル程度の高さの石人形がゆっくりとその姿を現す。

「お頭！ 遅くなりやした」

「待っておったぞ！ はようその小童を捻りつぶせ！ 褒美は望み

のままじゃ！」

強大な石人形の足元、その背後に隠れていた小男が僕に向けて嫌な笑いを浮かべる。……どうやらこいつが石人形を操る妖術師のようだ。

「南蛮渡来の石人形。貴様も魔術師の端くれなら、その強大な力はよく知るところであろう。対魔法使い用の兵器としてこれ以上の物はないということも、な。……やれっ！」

小男の声に石人形が反応する。僕に向かい振り上げられる固い拳。大人しく殴られる趣味はないので後方へ飛び、大きく距離をとる。石人形は僕という目標を見失い、固い木製の床にその拳を叩きつけ、轟音とともに大穴を開ける。力が強いという以前に、その重量自体が立派な武器になるわけか。

「南蛮渡来……。ゴーレムというやつですね。実際に見るのは初めてです。噂通り魔法が効かないかどうか、試してみますか」

威力を最大にした魔道波を連続で叩きつける。……うわあ、小揺るぎもしない。対人においてはそれなりの殺傷力を発揮するこの魔法も、石の塊相手では如何ともしようがない。

「効かぬ効かぬ。高速詠唱が自慢の『黒衣の魔術師』と云えど、一介の魔術師。こいつの固さ、その重量の前では手も足も出まい。……さあ、諦めてその首を差し出すがいい。武士の情けだ。一撃で終わりにしてやる」

「それはいかんぞ。儂らをここまで追い詰めてくれた、その報いは受けてもらう。一思いにやらずに、じわじわ痛みつけてやれ」

「お頭がそう仰るのであらば……。小僧、そう言うことだ。楽には逝けぬぞ？」

そう言ってまずまず嫌な感じで唇を歪める小男。

「どうせ最初からそのつもりだったのでしょうか？ 妖術師というのは性格歪んでる人が多いと聞きましたけど、本当ですね」

「き、貴様っ！ 拙者を愚弄するかっ！ 四肢をばらばらに引きちぎってやる！」

小男の言葉に反応した石人形が左右の拳を振りかぶり、交互に振り下ろす。

僕はそれを避け、右へ左へと飛びまわる。その隙を突き、妖術師本体に魔道波を放とうとするが、この小男、意外な敏捷さで常に石人形の背後に隠れるため、なかなかそのタイミングが掴めない。

「ふははははっ！ 手も足も出まい！ 逃げ回るだけか『黒衣の魔術師』よっ！」

実は手も足も出る。この石人形を潰す手段など幾らでも思いつく。水系の上級魔法で氷漬けにしてもいいし、火系上級魔法で溶岩になるまで熱し続けてもいい。ただ、どちらも後始末が面倒なので躊躇っているだけだ。氷漬けの石人形など置いていかれてはこの地に住む民にとっていい迷惑だろうし、大火事を発生しかねない火系上級魔法など論外である。

「さて。どうしましょうか……。っと、そうだ」

ぽんつと手を打つ。多分、あれが効くはず。

「どうした『黒衣の魔術師』よ。命乞いの言葉でも思いついたか？」

「いやいや。本は読んでおくものですねえ。対策を思いつきました。

……そこ、危ないですから離れたほうがいいですよ？」

「戯言を……！」

「忠告はしましたからね。いきますよ？」

僕は、今度はサポート魔法を呼び出す。『探查』の魔法を選択し発動。石人形をスキャンする。……うん。やっぱり『核』がある。……『ゴーレムには核があり、それを破壊すると行動が止まる』。昔、まだ元の世界にいた頃読んだ本にそんな話があった。知識とは偉大だ。例えばそれがライトノベルから得た知識であつたとしても、ね。

「貫けっ！」

今度は『魔道波』ではなく、『魔道砲』を選択し発動する。『魔道砲』は『魔道波』と同じ、魔力を叩きつけるだけの初期魔法の一つだが、『魔道波』が言葉の通り『波』、つまり扇状に広範囲に広がるのに対し、『魔道砲』は指向性をもって魔力を一点に凝縮する。先程のような一对多数の戦闘においては、威力こそ劣るものの範囲攻撃である『魔道波』のほうが使いやすい。が、一对一、または遠距離からの狙撃などにおいては『魔道砲』のほうが便利だ。その凝縮された魔力は、石の城壁ですらやすやすと貫通する。

——僕の手から発せられた光の矢は、ピキーンという甲高い音とともに石人形の核を正確に貫く。

核を破壊された石人形はその行動を停止し、一瞬の停滞の後、全身がばらばらとなり崩れ落ちた。

目の前に大質量の石の塊が落ちてきた衝撃で、小男の妖術師は泡を吹いて気を失っている。だから危ないって言ったのに。瓦礫で圧死しなかったただけ運のいいことである。

「……さて、と」

「ひっ、ひいひいっ！」

腰が抜けたのであろう。座り込んだままずりずりと後ずさる義銀の胸倉を掴む。

「……質問に答えてもらいましょう。織田様の領内から連れ去った女子供、どちらに監禁していますか？」

「……………」

「黙秘ですか。いいでしょう。……先程の魔法、なかなかの威力だったでしょう？ あれを人体に向けて発動すると、いい感じに穴だらけになるんですね。まっすぐ進むから人体の急所を避けれますし、かなり長い間苦しませることができるのですが……」

「……………！！ご、拷問する気かつ！」

「いえいえ。ただの例え話ですよ。ただ、僕はこれでも気は長いほうですが、それでも我慢の限界というものはありますからねえ」

そう言っただけで微笑みかけ、左手を意味ありげに掲げる。
さあ、これから魔法を発動しますよ、と言わんばかりに。

「ち、地下だつ！ 地下に牢がある！ そこに……」

蒼ざめた義銀がそう言いつつ、震える手で懐から鍵を出し差し出した。

「ありがとうございます。ではお礼はこれで」
最小の威力に抑えた『魔道波』を放ち、義銀の意識を飛ばす。さて……。

「……滝川さん。いるんでしょう？ 出てきてください」

僕の問いかけに頭上から返事があり、天井裏から忍び装束の一人の男がすつと降り立つ。

「いつもながらお見事な手腕ですな」

「お世辞はいいですから。思ったより苦戦しましたし。……ここ、

お任せしたいのですが、いいですか？」

「配下の者を呼びましょう。お手前はとうされるので？」

「もちろん地下へ行きます。それが目的ですからね」

「お供いたしましょう。……おい！　ここは任せた！　とりあえず全員縛っておけ！」

男……滝川一益の声に、やはり天井裏に忍んでいた数名の男たちが次々と降りてくる。

男たちは一糸乱れぬ動きで、気を失っている男や兵士たちを効率よく縛りあげていく。

「気をつけるよ。高久殿はお心が優しいからな。命を奪われた者はほとんどいないはずだ。意識を取り戻して斬りかかってくるやも知れんぞ？」

「……素直に甘いと言ったらどうです？」

皮肉に対し言い返す僕と、それに答えて大声で笑う滝川さんは、揃って地下へ向かった。

「——織田家家中の滝川一益と高久晃である！　皆の者！　怪我はないか！」

じめじめとした暗い地下牢。固い門によって封じられたその牢内には、十歳程度の少女から三十代くらいの妙齡の人まで、十人前後の女性が捕えられていた。

疲労し、色を失っていたその顔が、滝川さんの一喝によりみるみる力を取り戻す。

領民の織田家に対する信頼と人氣が窺い知れる一幕だ。

「織田様の……！ ああ、ありがとうございます！」

「助かったのね！」

「椿ちゃん！ これでお家に帰れるわよ！」

緊張が解けたせいかわき崩れる人もいる。無理もない。女性ばかりが浚われるということは、R - 18 的ないろいろな目的があつてのことだろうし。……それなのに十歳前後の少女がいるあたり、やっぱりあのおっさんは許せない。やはりもう少し痛めつけておくべきだったと思う。……と、それはともかく。

「……危うく流すところですが、僕は織田家家中の者じゃないですからね。何度も言いましたけど」

「『織田家家中の滝川一益と織田家に協力している高久晃である』とは長すぎるのでござるよ。細かいことはどうでもいいではありませんか」

「……ま、いいですけど。とりあえず……」

僕は牢内を見回す。

『斯波義銀の屋敷には女子供ばかりが捕えられている』……そんな噂を元に、探し人——先輩がいるかもしれないここまでやってきた僕。斯波義銀討伐はそのついでだ。

——あまり期待はしていなかった。でも実際にその中に目当ての人物、先輩がいないとわかると、やはり気落ちしてしまう。

「おりませぬか……？」

今までの軽快な口調と違い、僕を気遣うようにして問い掛ける滝川さん。

「……そのようです。残念ではありますが、織田様の領民を保護できたことだけでも良かったと思います。……えっと、皆さん、お怪我はありませんか？」

気持ちを切り替え、牢内の女性たちに努めて明るい声をかける。落ち込んでもいいことはない。さっ、仕事仕事っと。

「あ、あの……」

二十代半ばくらいであろうか？ 妙に色気のある女性が手を上げる。

「はい？ どこか痛みますか？」

「いえ。私ではなく、椿ちゃんが。抵抗した私を庇って棒で打たれました……」

そう言って視線を向けた先にいたのは十代半ば、僕と同じくらいの年頃の娘さん。

「えっ！ へ、平気です！ 椿は頑丈ですから！」

「嘘おっしやい。あんなに強く殴られたのに……」

僕は門を開け牢内に入る。椿と呼ばれた女の子はしきりに遠慮していたが、やや強引にその手を取り、袖を捲り上げてみる。……かなり酷い痣ができていた。うわ。痛そう。

「椿ちゃんは乱暴されそうになった私を庇って……。本当、すまなかったね椿ちゃん」

申し訳なさそうに目を伏せるお姉さん。

「……………滝川さん」

「なにか？」

「あのおっさん。ちょっと手酷く痛めつけておいてくださいね」
「承知仕った」

こんなかわいい女の子に手を上げるような男は万死に値する。今が戦国時代とはいえ、僕の中にあるルールに変わりはないのだ。

「さて。では失礼して」

僕は聖属性魔法の一つ。『治癒』を発動する。みるみる腫れが引き、きれいな肌色が甦る。

それを信じられないといった目で見ていた女の子が、はつとしたように言う。

「そのお力……そしてそのお姿。もしかして貴方様は『黒衣の魔術師』様では……？」

「え？ あ、いやその」
「如何にも。この方こそ我が織田家の護り神、『黒衣の魔術師』ごと、高久晃殿である！」

「た、滝川さん！ 恥ずかしいからそういうのやめてください！」
「何を仰る高久殿。拙者は事実を在るがままに述べているだけで……」

「じゃあそのにやけた顔はなんですか！？ 絶対僕の反応楽しんでますよね！？」

「気のせいでごさる。高久殿は被害妄想が激しいでごさるなあ」

「……まったくもう。と、とりあえず、これで痛みは引くと思います。お大事にね」

椿と呼ばれた女の子が、尊敬の眼差しでこちらを見つめるのに耐えかねて、ややぶつきらばうに言ってしまう。……こういうの苦手なんだよ……。可愛い女の子に対する耐性向上魔法とかないかなあ。ないだろうなあ。

「……さて、上も片付いたようでごさる。拙者は馬を飛ばして城に戻りますが、高久殿、ご同行されますか？」

「いや。僕、騎乗できないし。後ろに乗るのも怖いから飛んで帰りますよ」

馬上つて案外高いんだよね。早いし。

「……拙者からすれば、鷹のように遙か上空を飛ぶことのほうが、そら恐ろしく思えるものなのですが……？」

「それは感覚の違いっただけです。日が上ってから参内し、織田様にはご報告申し上げます。……では、滝川さん。また後ほど」

理解しがたい……と言った表情の滝川さんに別れを告げ、僕は地上に出る。

——月明かり。満天の空。初夏の気持ちいい風が頬を撫でる。

僕は『飛行』魔法を発動し、この世界での住処となる織田の城下町を目指して、ふわりと闇夜へ飛び立った。

第一章 第一部 黒衣の魔術師（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第二部 織田舞奈

——翌日。清州城にて。

僕は昨晚の戦果の報告のため、織田様への取り次ぎを頼む。
自分で言うのは恥ずかしいが、織田家の護り神、『黒衣の魔術師』
の名前は城内の隅々にまで知れ渡っており、こういったとき、余計
な詮索を受けず即座に謁見の間に通されるのはありがたい。

「——殿がお成りになりました」

側仕えの小姓がそう報告する、その声が終わるのも待たずに襖が
開け放たれる。

「おう！ 晃よ。無事なようで何よりじゃ！」

豪快に言い放つその人物こそ、『この世界』における織田家の棟
梁にして尾張国主。織田舞奈様、その人である。……そう。名前の
通りの、うら若き女性国主なのだ。

日の光を受け輝く髪は炎のように赤く、異国の血が入っていると
いう本人の言を雄弁に示している。すらりとした長身はこの室内着
よりも甲冑こそが似合うであろう。啞えたキセルが豪放な人となり
を演出し、信長の妹だというその姿を一層印象深くしている。

「滝川殿のご助力もあり、無事に帰参が叶いました」

そう言って頭を下げる僕。こういった言葉遣いに少しずつ慣れて
きている自分に今更ながら驚く。たった数カ月とはいえ、僕もこの
時代に馴染んできているかな。

「一益からも報告は受けておるぞ？ 自分は何もする必要もなく、

見てただけでした、などと言っていたが？」

「滝川殿のご謙遜ですよ。おかげで助かりました」

「む。相変わらず固いのうお主は。我とお主の仲ではないか。もつと碎けて話せ」

「雇用主と被雇用者の関係ですから、これで問題ないかと思いませんか？」

「我はそちと会つのを楽しみにしてるというのに……。つれないのう」

そう言つてがっかりとした表情を浮かべる織田様。その手には乗らない。織田様がそういう顔をする時は、必ず僕を口説き落とそうとするときだ。もちろん性的な意味ではない。自分の家中に入れと何度も繰り返し言われているのである。

「そうやって寂しがる振りをして、もう騙されませんか。……さつそくご報告したいのですがよろしいでしょうか？」

僕の言葉に先程とは別人のように表情を引き締める織田様。

「して、首尾は？」

「すでに滝川殿からご報告が上がっているとは思いますが、斯波一族の拠点は叩き潰しました。没われた織田様の領民も無事です。一族の棟梁、斯波義銀は滝川殿により捕えられました。」

「うむ。よくやってくれた。早速、義銀は追放処分としよう。……してその方の探し人は……？」

「そちらは残念ながら……」

「そうか……。すまぬのう。また兎には無駄足を踏ませてしまったようじゃ」

そう言つて軽く頭を下げる織田様。その様子を見て小姓が驚き固まってしまう。

「織田の棟梁ともあろう方が、そう簡単に頭を下げてはいけません」
「いや、我と晃は主従関係にあるわけではないからな。礼儀を尽くすのは当然じゃ」

「まあ確かにそうではありますけど……」

「やめてほしければ素直に我が禄を食め」

「それ新手の脅しですね。まったく手を変え品を変え、よく思いつきますね……」

呆れたように溜息をつく僕に、織田様は豪快に笑いかけた。

「それほどまでしてお主がほしいということじゃよ。そろそろ諦めろ」

「いやですよ。まったくもう……」

僕のいた世界のものとは少し違う、この世界の戦国時代。

魔法の存在も大きい、それと同じくらいに僕を驚かせたこと、それが所謂戦国大名たちの性別だ。信じられないことにその大半が女性なのである。

それには魔法と綿密に絡み合った理由がある。

この時代の合戦は刀や弓矢のほかに、魔法というものが基本戦力となっている。

遠距離攻撃ができ、その威力も十分である魔法は、しかし合戦時の主力とは成り得ていなかった。……あまりにも詠唱時間がかかりすぎるためである。一番簡単な攻撃魔法である『魔道波』ですら、詠唱に一分程度はかかる。戦場での一分は大きい。それゆえ、威力こそ強いとはいえ運用が難しい魔法は、合戦の主力というより、むし

る攻城戦などに使われることが多い。

……ちょうど、僕の元いた世界での火縄銃のような扱いなのだ。ちなみにこの世界には火縄銃は存在していない。異国から輸入されていないわけではなく、そもそもそういう物の存在がないらしい。多分、魔法がその代わりを務めているからなのだと思う。

……話を戻そう。——しかし、その長い詠唱時間によるリスクをも覆す大魔法が存在する。

群雄割拠する各戦国大名家が保持する、固有魔法——それは各大名家の一族にだけに詠唱の言葉が伝わる、言わば秘中の秘で、各家の棟梁のみが使うことができる一撃必殺の大魔法なのだ。

例えば目の前にいるこの織田家当主、舞奈様も『閻魔火炎地獄』という、名前からして既に恐ろしい魔法を使える。同様に上杉家が使える『軍神降臨』、武田家の現当主が開発したという『風林火山』などが有名だ。

……大前提として、魔法使いには女性が圧倒的に多い。攻撃魔法の初歩となる『魔道波』程度ならともかく、それ以上の魔法ともなると、なぜか大多数の男性には習得することが出来ないためである。その理由は諸説あるが、上位魔法ともなれば精霊に語りかけ、その力を借りる必要があるため、繊細な女性の方が向いているのではないかと？ というのが有力だ。真偽のほどは不明だが、多分、それで間違いないであろう。

——つまり、この世界が女性上位というわけではなく、各大名家の誇る固有魔法を使えるのがほぼ女性だけであるため、最大の力を持つ者が一家の棟梁となる戦国の習いに従い、自然と女性大名

が増えていったのである。

「……しかし話を戻すが、晁の探し人は見つからぬのう……」

何となく、この世界の大名家のことを考えていた僕は、織田様の愁いを帯びた声によって意識が戻される。

「いつしよに飛ばされたとはいえ、確実にこの世界にいるという保証はありません。織田家の力抜きにしてはその僅かな可能性に賭ける情報すら手に入りませんし、余りお気になさらぬよう」

「私の勢力がもっと大きくなれば、更に精度の高い情報も届くのであろうかの。……まだまだ尾張一帯を手に入れただけの我が身には力が足りず、まったくもって不甲斐ないことじゃ」

そう言つてらしくない溜息をつく織田様。

「しかし織田様。斯波一族を討つたことにより、この尾張は統一を果たしたのでありましよう？ 力が足りず……などということはないかと」

「そうは言つてもな。晁よ。こんな小国、東の今川が動けばあつというまに滅ばされてしまうわ」

「今川……。現当主は今川義乃でしたっけ？」

「さよう。……三河の松平家を従え、北の武田、東の北条と同盟を組んだ今川の狙いは、上洛に間違いないと専らの噂。既に出陣の準備を終え、今日にでも駿河の国を立つという話すらある。……まったく、頭の痛いことじゃ」

「……………」

——僕は知っている。その噂が正しいということ。
そしてその結末が、僕の知っている歴史と同じになるとは限らないということも。

……あまりにも有名な『桶狭間の戦い』。

駿河の今川義元が率いる数万の大軍に、時代の風雲児織田信長が二千の兵で奇襲を掛け、その首を打ち取ったという日本史における一大事件。……これを転機とし、織田信長は天下へと覇を唱えることになるのだが、しかしその勝利は、お世辞にも戦略的とは言うことのできない偶然の積み重ねの結果だった。

華麗な勝利に目を奪われがちであるが、『たまたま』、信長が到着したその時、今川家は戦力を分散しており（とは言っても奇襲をかけた織田家の二倍以上の兵力はいたのだが）、『たまたま』急に降りだした豪雨を避け、今川の陣では臨戦態勢を解いており、『たまたま』今川本陣には戦闘経験が豊富な兵が少なかった……こういった、幾つもの幸運の積み重ねによる、言わば薄氷を踏むような勝利だったのだ。

歴史に『i f』は禁物だというが、その幾つもの幸運のうちひとつでも欠ければ、織田家の勝利はなかったとも言われる。……そもそも、十倍の兵力に対し奇襲を仕掛けるというのであれば、そのタイミングは明け方か夜半に行くべきである。その一点においても、

信長の出陣の時間はあまりにも遅すぎるのだ。明け方に出陣した信長の軍勢が戦場に到着したのは昼過ぎだった。とても奇襲に向く時間だったとは言えない。

勿論、折からの豪雨、今川陣の油断という戦術的好機を逃さず討って出た信長の判断力は素晴らしいものだ。しかし、そこに至るまでの過程が、まさに織田信長という男の持って生まれた『天運』と、本人の感性、直感とも言うべきものだけで成されており、そこが逆説的に信長の異名を高めるのである。つまり。

『桶狭間の勝利は、織田信長でしか成し得なかった』と。

……長々と自説を唱えてみたが、要点はそこなのだ。

元いた世界での戦国の覇者、織田信長と血を分けた実の妹とは言え、信長本人ではない『織田舞奈』では桶狭間に勝利することはできないのではないか？

——だからこそ、僕は迷うし、対応に困るのだ。

目の前の織田舞奈様は、僕が違う世界、その未来から来たということを感じてくれている。それでいて、僕に自身の未来を尋ねることをしない織田様の自制心には感心するが、ともあれ僕の進言であれば素直に聞いてくれると思う。つまり、僕には僕の知っている歴史通りに織田家を勝利に導くことができるのだ。

しかし、それは正しいことなのか？

古今東西、どのような物語においても、過去に飛ばされた登場人物が歴史に関与しようとする、そこには大抵、破滅が待っている。タイムパラドックスというやつだ。歴史を変えようとする、または歴史をなぞろうとする主人公が『時間』というものに翻弄される…

…僕は過去にそんな本を幾つも読んだことがある。

つまり、僕は恐れているのだ。

自分が歴史の傍観者ではなく、当事者になってしまつてしまつてを。

だから僕は度重なる舞奈様の勧誘に応えることができない。

精々、僕自身の人探しの『ついでに』、反逆勢力に捕えられた女子供の救出や、盗賊の討伐程度しか行えない。

本来であれば、それすら歴史に対する関与なのかもしれない。でも、僕も食っていかななくてはいけないし、生活の糧を得るためには仕方のないと自分に言い聞かせつつ、織田家の依頼を受け生活費を稼ぐ日々を送っているのだ。

「……っと、話しこんでしまったな。晁に会える機会はなかなかないので、偶に会えるとなついつい時間を忘れてしまつわ」

話を切り上げるように織田様が言う。国司たるもの、やるが多いのであろう。

「呼んで頂ければいつでも参上致しますのに」

「馬鹿者。今のは遠まわしに『いつでも会えるように城内に住め』ということと言つたつもりじゃ」

「そうじゃないかと思いました。……でもまあ、藤吉郎殿のお宅もなかなか居心地がよいものですし、そもそも家中に入る気がない者を、城内に住ませるわけにもいかないでしょ」

「ほんに強情な奴だの……。まあいいわ。我は政務に戻るとする。
……この度は大義であつた。褒美は後ほど猿のところへ届けさせよう。以上じゃ」

「畏まりました。では私はこれにて」

……僕は深々と頭を下げ、謁見の間を辞した。

「晃！ 殿へのご報告は終わったのか？」

謁見の間を出て、手の行き届いた清州城の庭を歩いていると、背後から声がかかった。

「藤吉郎か。今終わったところだよ」

「晃は殿に気に入られておるからなあ。話も弾んだろ？」

僕は苦笑を浮かべつつ応える。

「相変わらずだよ。いい加減、勧誘は諦めて欲しいんだけどね」

「贅沢な野郎だ。俺なんか殿に取り入るために草履取りまでしたというのに！」

そう言つて笑いながら僕を小突く気さくなこの男。

僕の恩人にしてこの世界においては唯一の友人。そして大家でもある、木下藤吉郎。

——後の天下人、羽柴秀吉。まさにその人である。

「……で、今日はこの後どうするんだ？」

「んー。特にすることもないし、少し城下をうろついてから帰ろうかと思ってる」

「そうかそうか。つまり時間はあるということだな。うんうん」

にやりと笑う藤吉郎。……何だろう。悪い予感がある。

「……何を企んでいるんだ藤吉郎？ 素直に吐け」

「人聞きの悪いことを……。いや、実は滝川殿に頼まれごとをしていてな。ちよつと外まで付き合え」

そう言いつつ強引の僕の手を取る藤吉郎。

「お、おいっ！ 藤吉郎！ どこへ連れていく気だ！ 袖を引つ張るな！」

「いいからいいから。悪いようにはしないって」

「その発言をする人間は信じられないっ！ 離せっ！」

「まあまあ。行けば分かる」

「おいっ！」

……藤吉郎の馬鹿力に逆らえず、結局そのまま連行される僕であった。

「……で、目的地はこの茶屋か。男二人で仲良く団子でも食うのか？」

連れ去られた先は城下の端にある、小奇麗な茶屋。男二人で来て

も楽しくもない。まあ、ここの餡はなかなか上品な甘さで、結構気に入ってはいるんだけど。

「気色悪いことを言うな。滝川殿に頼まれたと言っていたらう？」

……おい！ 晃……じゃない、高久殿を連れてきたぞ！」

そう大声で店の奥に呼び掛ける藤吉郎。その声に呼ばれて出てきたのは一人の少女。

「あれ？ えっと、確か……椿さん？ だったかな？ 怪我は平気かい？」

「は、はい！ 高久様のおかげでもう痛みもありません！」

そう言いつつ慌ててぺこりと頭を下げたのは、斯波義銀のところに捕えられていた女子の一人、椿さんだった。

「そりゃよかった。……で、どういことだ藤吉郎？」

「そう睨むなよ。例の斯波義銀一派に捕えられていた女子供、これは滝川殿が村へ送り届けることになっているのだが、その前にこの椿とやらがな、命の恩人である『黒衣の魔術師』にどうしても一言、直接礼を言いたいと訴えたらしく、引き合わせてやってくれと頼まれてなあ」

「……………」

「いやいや。宮仕えの辛いところだ。上役に頼まれたとあつては断ることもできず、仕方なくこうしてお前さんを連れてきたというわけだ」

「明らかに楽しんでるよなお前」

「とんでもない。ただ、朴念仁の誰かさんに少しでも女子に慣れてもらおうと……」

「余計な御世話だ！ このっ！」

僕の振り上げた拳は、藤吉郎に軽く避けられてしまう。魔法を使

われない僕の攻撃など、戦場に生きる藤吉郎にとっては止まって見えるのである。なんか悔しい。

「まあまあ、そう怒るな。……では俺は行くからな。あとは好きにしろ」

そう言ってくるりと背を向ける藤吉郎を、慌てて引きとめる僕。

「お、おい！ どこ行くんだ？」

「どこってお前。城に戻るに決まっているだろうが。さっきも言った通り、こちらは悲しき宮仕え。日も高いうちから城を抜け出して女子と茶屋にしけこむような真似はできないだろ？」

そう正論で返されると何も言えなくなる。

言葉に詰まる僕の肩を抱くようにして、藤吉郎が小声で言う。

「……何なら今夜の晩飯は用意しないよう、ねねにも言っておくぜ？」

「なっ！ おまえっ……！ どういう意味だそれは！」

「……ま、たまには息抜きも必要ってことだ」

そう言って僕を離れた藤吉郎は、本当に城へ向かって歩きだしてしまった。

残されたのは僕と、椿と呼ばれた少女の二人。……なんか、気まずい。

椿さんもそう感じたのであろう。場を取り繕うように話し始める。

「あ、あの、先日は本当にありがとうございました！」

「あ、いえいえ。大したことはありません。気にしないで」

「きよ、今日はそれをお伝えしたくて……。すいません。お時間を取らせてしまいました……。ご迷惑でしたよね？」

「そんなことはないですよ。返って気を遣わせてしまい申し訳ないとは思うけど」

「そ、そうですね……」

うん。我ながらすごくきこちない。

藤吉郎に言われるまでもなく、僕ももう少し、女の子の扱いに慣れたほうがいいとは思うんだ。でもいかんせん、先輩が初恋だった僕にはその経験値が大幅に足りず、もじもじと居心地悪そうにしている椿さんを持て余してしまう。……いや、確かにね、先輩ほどじゃないとしてもこの子だって十分可愛いとは思うんだ。うん。ただね、だからこそ、その、対応に困るといつか……。

ぐーっ。

……その音は椿さんのほうから聞こえた。正確にはその腹部から。思わず目を向けた僕の視線の先には、真っ赤になって俯いてしまっただ椿さん。

「……椿はもう、お嫁にいきません……」

この世の終わりみたいな椿さんの声を聞き、なんか緊張が解けた。

「ぷっ。くくく……」

「わ、笑うのは酷いです！ あんまりですっ！」

涙目で訴えかける椿さんに、まあまあと手を向け、僕は店の奥に声をかける。

「すいませーん。団子を一皿とお茶を二人分。……ごめんごめん。実は僕もちよっとお腹がすいてたんだ。……よかったら付き合ってくれないかな？」

——僕のその言葉に、椿さんはやっと笑顔を浮かべてくれた。完
熟トマトみたいに真っ赤なままではあったけど、ね。

第一章 第二部 織田舞奈（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第三部 先輩との出会いと異世界への旅立ち

「——おいしいですねえ、このお団子。本当に甘くて頬が落ちそうですよ」

そう言って幸せそうに微笑む椿さん。とろけそうだ。

「そうかな？ 僕には控え目な甘さだと感じるけど。いやそれがいんだけどね」

「高久様は甘党なのですか？ 椿には十分ですけど……」

……この時代、砂糖ってまだ貴重だったわけ？ 覚えてないや。

「はあー。お団子は美味しいし天気はいいし、椿は幸せです……」

目を細めて空を見上げる椿さん。……なんか猫っぽいなこの子。

「そりゃよかった。……そろそろ本格的な夏がくるなあ」

「ですねえ。……ところで、その、高久様？ そのお召し物、暑くないのですか？」

そう言って僕の真っ黒なコートの生地を、控え目に摘む椿さん。

「ん？ ……うん。実はかなり暑い……。まあ、真夏になったら常

時、水系の魔法で涼しくするようにするつもり」

「お脱ぎになればよろしいかと思うのですが……？」

「そういうわけにもいかないんだよね。……椿さんにならいいかなほら、これ」

周囲に目を配りつつ、僕はコートの前をそつと開く。その裏側、左胸のあたりに横一列にずらりと並ぶ、裏地に取り付けた五個のICレコーダーを椿さんに見せる。

「これが僕の魔法の元。僕のいた世界では『ICレコーダー』と呼ばれていた機械なんだ」

「な、なんですかこれ？ は？ 『僕のいた世界』？」
「上から順番に『魔道波、魔道砲』『防御結界』『攻撃系魔法』『回復系魔法』『サポート系魔法』……じゃ通じないか。『補佐系魔法』、その呪文が籠められている。この機械に魔法を記憶させておくことにより、僕は僕自身の力によらず、魔法を高速で……というかほとんど無詠唱で起動することが出来る。……それが『黒衣の魔術師』の力なんだ」

——僕はこの時、多分、『王様の耳はロバの耳』がしたかったのだと思う。

よき友人や理解者に恵まれたとはいえ、異世界にいる僕は常に孤独を感じている。それは、極一部の人間にしか正体を明かせない身分、多数の秘密を抱えた人間が感じる自然な感情だ。……偶に、何もかもをぶちまけてしまいたい衝動に駆られるのだ。

身近な人間にそれをすることはできない。ある意味『未来から来た』と言っても間違いではない僕の正体を知れば、よからぬことを企む輩もすり寄ってくるかもしれない。

増してや敵にそれが伝わってしまったら……。

今でこそ『黒衣の魔術師』『織田家の護り神』などと祭り上げられている僕ではあるが、その強さの元がばれてしまえば、その対応など幾らでもあるのだ。

——そんな、愚痴を零すことすら許されない生活。織田家の依頼による度重なる戦闘。元の世界に帰る目途すら立たない自分。そして、見つからない探し人。大事な僕の先輩。

そう言った諸々のことに、自分でも気がつかないうちに疲労をた

め込んでいた僕は、物言わぬ花に秘密を打ち明けるように、目を白黒させている椿さんに自然と語り始めていた。

……どこことなく、先輩と雰囲気似ている椿さんに。

「わからなくてもいい。でも、もしよかったら僕の話聞いてくれないかな？」

——僕が『先輩』、吉川 雪先輩に初めて会ったのは三月の頭。

校庭ではそろそろ梅の花がほころび始めようとする、でも、まだまだ肌寒い日が続く放課後のことだった。

当時高校一年だった僕は、何故かは覚えていないけど二年生のクラスが並ぶ廊下を歩いていて。多分、「来年からはこの階に通うんだなあ」とか考えていたんじゃないかな。

人のいる時間にそんな目立つことをするわけもなく、かなり遅い人気の無い時間だったことは覚えている。……だからこそ、微かに教室から聞こえてくる歌声に気がついたのだ。

誘われるようにそっと、歌声が聞こえる教室のドアを開けた僕の目に映ったのは、窓際に佇み、透き通るような声で囁くように歌う一人の女子生徒。長くさらさらとした黒髪と、強く抱きしめたら折れてしまいそうな、儚げな雰囲気を持ったその歌声の主は、僕は一瞬で心を奪われた。

……今だからわかる。あれは俗に言う『一目惚れ』というやつだ

った。

その女子生徒は目を伏せていたために僕の存在に気がつかず、ワ
ンフレーズを最後までしつかり歌いきり、ふーっと深呼吸をしたと
ころでようやく僕と目があつた。

——時間が止まった。

「い……」

「い？」

「いやあああああ！！！！」

儚げな雰囲気吹き飛んだ。

どうしたんだこの人！？　なんで不審者を見かけたような叫び声を
あげてるんだ！？

……　って！　こんな遅い時間に一人で教室にいる女子生徒を黙って
見つめている僕は不審者そのもの！？　よく言ってもストーリーじ
やないかつ！？

「い、いやっ！　違うんです僕は決して怪しい者じゃなくただ歌声
に惹かれて」

「やつぱり見られてたああ！！　しかも聞かれてたああ！　恥ずか
しいいい！！」

えっ？　そっち？

「もう駄目です私は！　かくなる上はここから逃亡するしか……」
そう言つて、おもむろに窓枠に足を掛けようとする女子生徒……
先輩だよな。　って！

「待つて先輩！　ここ三階！　飛び降りたら現世から逃亡しちゃうつ！」

「多分平気！　私、よく『鳥頭』って言われるし！　今なら空も飛べる気がする！」

「それ、『空を飛べそう』って意味の例えじゃないから！　そんな聞いているほうが悲しくなるような根拠を信じて飛び降りたりしないで！」

「あいつ！　きゃんっ！　ふらーいつ！」

「待つてくださいつてばー！ー！！！！！」

——これが、この綺麗なオープニングとそれをあっさりとぶち壊すその後の一幕が、僕と雪先輩の出会いだった。

「……なるほど。つまり吉川先輩は演劇部で、卒業式の記念講演でミュージカルの準主役到大抜擢されたのはいいけど、歌に自信がなく一人で練習していたと」

「……はい」

囁くような声で返事をする先輩。

「で、つい夢中になつて僕の存在に気がつかないまま、ノリノリで歌いきってしまったため、その一部始終を僕に見られていたことにショックを受けてしまったと」

「………はい」

蚊の鳴くような声で返事をする先輩。

「そして見られた恥ずかしさと、無人だと思っていた教室に人がいたことに錯乱して、思わず窓から飛び降りて逃亡しようとしてしま

つたと」

「……………はい」

もはや可聴範囲下限ぎりぎりの音量で返事をする先輩。

「……………ふう……………」

「な、なんですか！ その呆れ返ったような溜息はっ！」

涙目で訴えかける先輩。……………近くで見ると意外と小柄だ。僕の肩くらいの身長。しかも童顔。眉のあたりで綺麗に一直線に切り揃えられた前髪。日本人形みたい。

そんな先輩が上目づかいで睨んでくるものだから、怖いというより、その……………。

「かわいいですね」

「な、なにを言ってるゆんですか！！」

あ。噛んだ。

駄目だこの人。第一印象とのギャップが凄すぎる。ほんと駄目だ。主に僕が。

……………あれから数分後。数十分後だったかもしれない。錯乱した先輩の飛び降りをなんとか思い留めさせ、驚かせてしまったことを謝り、ついでにお互いの自己紹介などもすませた僕たちは、あらためて先輩の奇行に関し話し合っていた。

「……………だ、だってね、高久君。演技のほうならともかく、自分の歌声ってよくわからないじゃないですか。もしかしたら私の歌って、ジャ。アン級の破壊力を持った歌なのかもしれない……………。そんなの聞かれたら、逃げ出したくもなりますよう……………」

「『ボエー』って歌うのって、案外難しそうですよね」

「あうう……………。やっぱり私の歌ってそんな感じなんだ……………」

「ああ違いますからっ！ ナチュラルに飛び降りようとするのはや

めてくださいっ！……もう！わかりました！先輩、何でもいいからちよつと話してみてください」

ふらふらと窓へと向かう先輩を引きとめながら、僕はポケットの中に常備している愛用の機械を操作する。

「えっ？何でもって言われても困りますよう……」

『えっ？何でもって言われても困りますよう……』

「ひゃあっ！なにっ！？なに今の！？」

……いい反応するなあこの人。そう思いつつポケットから機械を取り出す。

「ICレコーダーです。先輩の声を録音してみました。……綺麗な声ですよ」

「あ。うん。ありがとう……。でも、なんでこんなのもってるの？」

「趣味でして」

「えっと……趣味というと……ま、まさか盗聴……とか？」

「失礼ですね！僕、映像というか音響の仕事に興味があるんですよ！」

「あ。そ、そうなんだ。ごめんなさいでした」

まあ、いいけど。実際、ICレコーダーを持っているとこの手の誤解はよく受けるし。

「……ふーん。そっか。私の声ってこんな感じなんだ。ね、ね。もう一回聞かせてもらってもいいですか？」

「はいどうぞ。……その本体右側のボタンを押すと再生します」

「えっと……どれかな？」

「それですそれ。……違いますそれは電源です。……もしかして、機械苦手ですか？」

「……恥ずかしながら、いまだに地デジの予約録画が出来ないレベルでして……」

そう言つて悲しそうに俯いてしまふ先輩。……その言葉も表情も僕の涙を誘う。

「貸してください。……はい。いきますよ？」

もう一度、先程録音した先輩の声を再生してあげる。

きゃっきゃと子供のように手をたたいて喜ぶ先輩。……なごむなあ。

しばらくの間、言うとおりに録音と再生を繰り返していた僕に、先輩が言った。

「便利ですねえ、これ。これがあれば練習も捗りそうです。……でも、私には使いこなせないからだめかー。残念でした」

あははー……と乾いた笑い声を上げる先輩。

……気がついた時には、僕の口は勝手に言葉を紡いでいた。

「あの、先輩。もしよければ、僕に練習のお手伝いをさせて貰えませんか？」

——その提案に恐縮し、遠慮しようとする雪先輩をやや強引に説き伏せた僕は、翌日の放課後、さっそく自慢のICレコーダーたち

を持参し待ち合わせの場所である先輩の教室へ向かった。

さすがに直接、いきなり演劇部へ押しかけるのは、先輩にも他の部員にも迷惑だろうと考えたからである。

「あ。ほんとに来てくれたんだ。ありがとう高久君。よろしく願います」

ぺこりと頭を下げる先輩。長いさらさらとした黒髪が、綺麗な顔の横をはらりと流れる。

「気にしないでください。僕が好きでやってることなので」
そう言いつつ机の上に六個のICレコーダーをずらりと並べ始める。

「えっ？ あ、高久君？ こんなにいっぱい使うの？」

「ええ。複数のレコーダーがあれば、同じ歌でも高低差や音量、スピードを変えて比較することが出来るでしょう？」

ぽん、と手を打って頷く先輩。こういう仕草がいちいち可愛いくて困る。

「なるほどです。賢いですね。……あ、でも、もしかして高久君。これ、私の為にわざわざ買い足してきてくれたとか……？」

「もともと複数持ってたんですよ。……ま、正直に言えばほんのちよつと新規で購入したものもあります。でも大したことはないのに気にしないでください」

ええ。ほんのちよつと。たったの四個ほです。そう心の中で付け加える。……貯金の半分が吹っ飛んだが、そんなのは些細な問題だ。

「さて。時間もありませんし、さっそく始めましょうか」

……僕の言葉に、春の陽だまりのような笑顔を浮かべてくれる先輩。

この表情が見れるのであれば、ICレコーダーの一つや二つ、三つや四つくらい、本当に安いものだ、心からそう思えた。

——その日から始まった先輩と僕との時間は、楽しかった。

僕の学校の演劇部は、準主役を張る雪先輩がICレコーダーの存在を知らない（それは正直、どうなのかとも思ったが）という、お世辞にも本格的とは言えないレベルのもので、活動時間も割と短め。おかげで、そのあとから始まる僕らの自主練の時間はそこそことることができた。

最初のうちこそややぎこちなく、遠慮するようなそぶりも見せていた先輩ではあったが、

多分、本質的に人見知りはしない性格なのだろう。すぐに打ち解けてくれた先輩は終始ご機嫌な笑顔を浮かべ、気持ち良さそうに歌う。

僕はその澄んだ歌声を堪能しつつ、ICレコーダーを操作する。

録音された自分の歌声を、時に真剣な表情で聞き直し、時におどけた表情で百倍速にしたりして笑う先輩と、そのころころ変わる表情に見惚れる僕。

授業が午前中で終わる土曜日には、二人でファーストフードでお昼を食べた。

授業がない日曜日には、一日中いっしょにいた。お昼は先輩お手製のおにぎりだった。ちょっと形が崩れていたけど、とてもおい

しかった。

——そうして二人だけの時間を過ごすうちに、いつしか『吉川先輩』は『雪先輩』へ、『高久君』は『晃君』へとその呼び名を変え、僕はますます、この小柄な先輩への想いを深めていった……。そして、多分、それはきつと先輩も同じだったと、信じている。

断定できないのは、答えが聞けなかったから。

——僕たちの運命が狂ってしまったあの日。それは終業式を翌日に控えた三月半ばにしては妙に肌寒い、なんとなく不安を覚えるような曇り空の日であった。

「……………あ。あ。あー。あー。……………うん。やっぱりちょっと声が枯れてるー」

そう言いつつ、マフラーに覆われたその華奢な首のあたりを押さえる先輩。

「雪先輩がんばりすぎなんですよ。本番前に喉を潰したりしないでくださいね」

たはーと照れくさそうに微笑む先輩。

「や。でも、ほら。もう本番まで半月だしね。ここでがんばらないと、って思ったらさ」

「それはそうですけど。でも自主連で声が枯れて本番で歌えませんでしたー……では洒落になりませんよ？」

「む。それは確かにそうだけどー。……あつ、そうだ」

何かを思いついたように表情を輝かせて、僕を無邪気に見上げる先輩。

「その時は晃君に任せちゃう。もう私のセリフも歌も、全部録音してあるでしょ？ 晃君が舞台袖からそれを再生して、私は口パクで……」

「いいですねそれ。たまに百倍速にしますから、がんばって口を合わせてくださいね？」

「ひゃ、百倍！？ 早口言葉にも程があるよ！」

「仕方ないですね。じゃあ逆にスロー再生にすることにします」

「すつごく間延びしたミュージカルになりそうだね。むしろパントマイムだよねそれ」

「それはそれで見てみたい気もしますが……。でも却下です」

「そうだよねー。やっぱり楽しむこと考えちゃいけないよねー」

「いえ。違います。……万が一、本当にそんな事態になった時には、僕が完璧にフォローしますけど、でも、そういうことじゃなくて、その……先輩の晴れ姿、僕はすごく楽しみにしているから……」

真っ赤になって俯いてしまった僕を、きょとんとした目で見ていた先輩は、やがて僕のがうつったかのように赤面し、そつと僕のコートの手をとる。

「あ、あの、明後日から春休み……だよな？ あ、晃君は、その、は、春休み中も、私の練習に付き合ってくれるの、かな？」

先程と同じように、でも先程とは明らかに違う、何かを期待するような潤んだ目で僕を見上げる雪先輩。……ここだ！ ここしかないっ！ 何度も練習したあのセリフを……！

「あ、当たり前です！　なぜなら僕は！　その！　えつと僕は！」

……なぜここで言葉に詰まる僕！　言っただ！　一世一代の勇気を振り絞れ！

「僕は……その……せ、先輩のことが……えつと」

……だめだ。なんだこのヘタレ僕。ここで詰まっちゃだめだろう……。でも、もし、万が一、いや千が一？　もしかしたら十が一くらい？　の確率でごめんなさいされたら……。

ネガティブな考えがぐるぐる回り、その先を続けられない僕。……そんな情けない僕の思考の堂々巡りは、優しく、きゅつと僕の手を握りしめてくれた先輩の、小さく、そして暖かい手によって止まる。

「せ、先輩……？」

「晃君。その……言って？　その先。大丈夫。私、ちゃんと答えるから。きつと晃君が望む答えをちゃんと伝えるから。だから、だからお願いします。その先を聞かせてください」

そう言っ、につこりと笑ってくれる先輩。……ああ。あれだ。

普段頼りなくて、子供っぽくて、まるで年下みたいだけど、やっぱり雪先輩は先輩なんだ。こんな僕を導いてくれる、優しい年上のお姉さんなのだ。

……大好きです。先輩。

僕は大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせる。そしてその言葉を……。

——そして、世界が『ずれた』

目の前にいる雪先輩が二重三重にぶれていく。先輩だけではない。そばにあった電柱も『痴漢に注意』の看板も、その姿を何重にも重ねている。

「あ、晃君！」

「先輩！　しっかり掴って！」

繋いだ手にしっかりと力を入れる。握り返してくる先輩の手。

その小さな絆を離さぬよう、また自分自身の混乱を打ち消すようにさらに力を入れる

けど。

キーンという甲高い音とともに意識が薄れていく。衝撃で意識を一瞬で奪われたわけではない。徐々に思考が暗闇に塗りつぶされていく、そんな感覚。そしてそれは僕だけのものではなく、先輩も同じだったようで。

……先にこの暗闇に呑みこまれたのは先輩だった。ふっと、その手から力が抜ける。

慌てて握り返そうとするも、僕自身もはや限界で。目の前は真っ暗になり。

——全てが黒に塗りつぶされた。

第一章 第三部 先輩との出会いと異世界への旅立ち (後書き)

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第四部 木下藤吉郎と魔法

——瞼を開き、最初に目に入っただのは煌々とした満月だった。
気がつくと僕は、暗い森の中、その地面に大の字に倒れていた。

「あれ……？　なんだこれ？」

寝起き特有の朦朧とした意識で、寝転んだまま周囲を探る。……
地方都市ながらそれなりの規模の街に生まれ育った僕は、月明かり
のみという夜本来の暗さに戦き、深夜とて絶えることのなかった車
のエンジン音、その他の生活音が一切ない自然の静寂さによって逆
に強調される耳鳴りに怯える。

「何なんだ一体……？　僕、ついさっきまで先輩と、先輩に……先
輩っ！？」

不自然に伸ばされた僕の右腕。その手は何かを離すまいとするか
のように固く握りしめられおり、しかしなにも掴んではいなかった。
一瞬で跳ね起き、周囲を見回す。鬱蒼とした森の中のちよつとし
た広場の真ん中。そこに僕は立っていた。すぐ側には僕の学生鞆が
転がっていたが、目当ての人物はそこにはいなかった。

「せ、先輩！　どこですか！　無事ですか！？　先輩！」

ガサリ。

僕の叫びに反応するかのように、目の前の藪が音を立てて動く。

「先輩ですか！？　ここどこですか？　一体何が」

……僕の声は唐突に途切れる。目の前にいたのは雪先輩ではなかったからだ。

「……なんだよ。久しぶりの獲物だっというのに男かよ」

「まあ、そう言うな相棒。……見ればその格好。小綺麗な身なりだし、これは噂に聞く『伴天連』ってやつでねえか？　だとしたら大儲けだぞ？」

藪を掻き分け出てきた二人の男。その姿はお世辞にも上品とはい難く……というか、つるりと剃り上げられた頭頂部と、無造作に伸ばされた両サイドの髪。だらしなく着崩された着物。簡素な薄汚い甲冑もどきを付け、何より右手に下げられたその刀は……。

「お、落ち武者……？」

「うるせえ！　好きで落ちたわけじゃねえわ！」

「言ってくれるじゃねえか、兄ちゃん……！」

僕の発言に憤怒の表情を浮かべ、こちらへ歩み寄る二人。

「う、うわあああああ……！」

身の危険を感じ、咄嗟に鞆を掴み走りだす僕。

「まてこらっ！」

「逃がすかつ……！」

案の定、刀を振り上げ追いかけてくる男たち。なんだかよくわからないが、こいつらはやばい！　捕まったら何されるかわからない！　混乱の極みにある今の僕でもそれだけは理解できる。そう思い全力で走るが、いかんせん、月明かりのみの闇夜。舗装どころか、

そもそも道ですらない山肌を走り慣れない僕は、あつというまに追いつかれ背中から力任せに突き飛ばされた。成す術もなく地面に転がる僕。

「手間かけさせやがって……」

ギラギラした目でこちらを睨みつつ、その刀を振り上げる男。

あまりのことに、僕は逃げるどころか声を上げることもできない。

何だこれ？　僕の身におきているこれは一体なんだ？　現実なのか？

「さあ、素直に金目の物を差し出し……」

ひゅん！

鋭く風を切る音とともに、男の腕に矢が突き刺さる。

「ぐあつ！」

「だ、誰だ！」

その声に応えて現れた一人の男。背は高いほうではない。また身なりも絢爛豪華というわけではないが、少なくとも目の前の落ち武者たちよりは、清潔でしっかりと整った戦装備を身にまとった僕と同年代の男。

「山賊風情に名乗りを強要される云われはないが、織田家家臣、木下藤吉郎と申す。……最近、この山を根城として強盗を繰り返す輩がいるという領民の訴えを聞き、派遣された者だ。さあ、素直に縄につくか討ち死に覚悟で俺に斬りかかるか、好きなほうを選べ」

そう言つて弓を投げ捨て、男は腰の刀をすらりと抜き放つ。

「お、おい。織田家のやつだぞ」

「どうする？」

「どうするもなにも、相手は一人。こっちは二人。捕まるくらいならここは……」

落ち武者たちの方針は決まったようだ。こちらも刀を構え男に相対する。睨みあう二人と一人。——その緊張がピークに達したその瞬間。

「でえいつ！」

「甘いつ！」

野太い気合とともに打ち込んできた落ち武者Aの刀を、下からすくい上げるように弾き返す男。刃が澄んだ音を立てる。力任せの斬撃を防がれ、踏鞴を踏む落ち武者Aに今度は男のほうから斬りかかった。

その大上段からの打ち下ろしに辛うじて刃を合わせた落ち武者。そのままぎりぎりどつて鎧迫り合いが始まる。

「ぬうう！！ おいつ！ いまだ！ 斬れっ！」

落ち武者Aの指示で、先程弓矢に貫かれた落ち武者Bが、怪我をしていないほうの手に持ち替えた刃を頭上に構える。

「もらったあ！」

鎧迫り合いを強要されている男にこれを防ぐ手立てはないように見えた。だがしかし、男は不敵に笑う。

きいん！

その澄んだ音は男の背後、大木の陰から聞こえた。弓矢とは違う

白銀の光が、今まさに男に斬りかかろうとしていた落ち武者Bを貫く。音もなく崩れ落ちる落ち武者B。

「さすがはねねじゃ！ お見事！」

「まったく。藤吉郎様は無茶が過ぎます。危ないじゃありませんか」

「ねねが魔法でなんとかしてくれると信じていたからな！」

「……もう。おだてても何も出ませんからね」

大木の陰から出てきたのは着物を着た一人の女性。ふつくらとした女性らしい体のライン、優しげで母性を強く感じるその表情。まるでいたずら好きの幼子を叱るように、藤吉郎と呼ばれた男を軽く睨む。

「……さて、これで立場は逆転したわけだが」

「ひ、ひいいい！」

破れかぶれになった落ち武者Aのがむしゃらな攻撃を軽くいなし、袈裟掛けで一刀の元に斬り棄てる男。

「でええい！」

血飛沫を上げ、地面に倒れる落ち武者A。その絶命を見届けた男は、刀についた血を懷から取り出した布で拭いつつ、僕に向き直った。

「はて。奇妙な格好をしたご仁だが、怪我はないか？」

……突然放り出された見知らぬ世界。落ち武者としか表現のしようがない男たち。命の危険。現れた織田家家臣と名乗る戦装束の男。TVでしか見たことのない立ち廻り。男を貫いた白銀の光。……そ

して切り捨てられ、死んだ落ち武者。

そんな幾つもの人生初体験を僅かな時間のうちに強制させられた僕は、まるで阿呆のように口を開け、カクカクと頷くことしかできなかった。

「……うーん。未来からねえ」

死体の転がる場所から離れ、大樹の根元に火をおこし暖を取る僕たち。

何とか気を取り戻した僕が、自分の体験したことをしどろもどろに、それでもようやく話し終えると、藤吉郎と名乗った男……と、いか、木下藤吉郎と言えば、あれだよな。日本史のテストには必ずその名前が出るあの男。——羽柴秀吉。……は、信じられぬという風に首を捻る。

「僕にも信じられません。けど、事実、です」

「確かにお主のその格好。この日の本のものとは思えぬが……ううむ」

学生服の上に黒いコートを身に付けた僕をじろじろと眺める藤吉郎。

「まあまあ。藤吉郎様。そのように疑ってばかりでは話が進みませんよ?」

ねねと呼ばれた女性——僕の知ってる歴史では確か、北政所……だっけか?

「しかし、ねねよう。行き掛かり上助けたとはいえ、こいつあから

さまに怪しいし……」

「木下藤吉郎様。元からの武家ではなく織田家に仕官し、出世して家臣としてとり立てられていますね。将来は安泰です。また奥方であるねね様とはこの時代としては珍しい恋愛結婚。しっかりもののねね様は生涯あなたを愛し陰から支えてくれるでしょう。美しく優しい、まさに理想の女性とのご結婚。同じ男としてうらやましい限りです」

「おい。ねね。こいつのいうことは本当だ。全て信じるぞ俺は」

……ありがとう日本史の田中先生。あなたが授業中にくれた雑談のおかげでこの男の信頼を得ることが出来そうです。元の世界に帰れたらもう二度と授業中寝たりしません。

百八十度どころかさらに一周して五百四十度ほど意見を変える藤吉郎。そんな藤吉郎を呆れるようにして見るねね。

「さつきと言っていることが全く違うじゃありませんか……」

「ねねの魅力が分かる男に嘘つきはおらぬよ」

「……もういいです。まったくあなたときたら……」

そう言っつてツンとそっぽを向くねね。しかし満更でもなさそうに赤くなつて微笑んでいる。恋愛結婚説は本当だったんだな。なんだこのバカカップル。滅びればいいのに。

「なにはともあれ、晃さん？ 先程はすごい勢いで転んでいましたけど、本当にお怪我などございませんか？」

「えっ？ あ、はい。多分どこも……痛っ！」

重ねてそう言われてようやく気がつく。目の前に迫っていた命の危険に気を取られ自覚がなかったが、どうやら手酷く腕を捻っ

たらしい。安心して気が緩んだ途端、ひどい痛みが襲ってくる。

「……すいません。どうやら捻挫したようです」

「やっぱり。さ、手を出してください。治療しますから」

そう言われおずおずと手を差し出したが、ねねは僕の腕に掌を向けたまま、何をするわけでもなく小声で何かを呟いているだけだ。

……体感で二分ほどたった頃だろうか、ねねが言葉を切ると、その掌がぼつと仄かに暖かい光を放ち始め、それが僕の腕を包み始める。

「な、なんですこれ？」

「なんですつてお前。魔法も知らないのか？　ねね自慢の治癒魔法だよ」

「ま、魔法！？　あつ！　そう言えばさっきのあの男を倒した光も……」

「あれは攻撃魔法の一種で『魔道砲』だな。……というか本当に知らないのか？」

「僕のいた世界では魔法なんてものはありませんでした……」

痛みがみるみるうちに引いていく。これが、魔法？

——戦国時代に魔法が存在したなんて僕は知らない。ってことは、僕は過去に来たと思っていただけ、実は違うのか？　違う世界なのか？

「終わりましたよ。晃さん」

そう言つてにっこりと笑うねね。

「あ、ありがとうございます、ねね様……。すごいですね魔法って」「『ねね』で構いませんよ。——そうですね。詠唱に時間がかかるのが難点ですけど、この程度ならば誰にでも使えますし、便利では

ありますね」

「だ、誰にでも？」

「はい。魔法と言うのは言の葉を積み重ね、地に満ちる魔力を吸い上げ効果を得るものです。精霊の力を借りなければならぬ上級魔法ならともかく、先程の『魔道砲』や今の『治癒』などでしたら、言の葉さえ正しく唱えられれば誰にでも使えます。……興味がおありでしたらお教えしますけど？」

「ぜ、ぜひお願いします！ あ、ちょっと待ってください」

僕は鞆からICレコーダーを取り出す。

「あら？ 晃さん、それは？」

「気にしないでください。お願いできますか？」

「はい。では攻撃魔法の基礎『魔道波』を」

「『魔道波』？ さっきのものとは違うのです？」

「先程お見せしたのは『魔道砲』。今からお見せするのは『魔道波』です。魔力の波動をぶつけるのが『魔道波』で、それを一点に凝縮するのが『魔道砲』なんです。『魔道波』のほう若干ですが言の葉が短いのでこちらのほうがよろしいかと」

「さっきみたいな狙撃ならともかく、乱戦にでもなれば攻撃範囲の広い『魔道波』のほうが使いやすいしな」

ねねの説明を藤吉郎が補足する。

「なるほどなるほど。ありがとうございます。改めてお願いします」

「はい。では……」

目を閉じ、呪文の詠唱を始めるねね。僕はそれを録音しつつ、時間を計る。

やがてまた、ちょっと距離の離れた藪に向けたねねの手に光が灯り、言葉が切れた瞬間に輝く波動となり発射され、その先の木々をなぎ倒す。……詠唱時間は一分ちようど。

これ繰り返し聞いて覚えれば、きっと僕にも魔法が……。

「すごいです……。威力は固定なのですか？」

「単純に呪文を唱える音量で上下できます。大きな声を上げれば威力も強くなりますね。……唱える言の葉を書き記したものが我が家にありますので、それを覚えれば」

「だれだっ！」

ねねの言葉は藤吉郎の鋭い叫びにかき消される。

がさりと藪を掻き分け、先程の男たちと似たような格好をした、何人もの男たちがのそりと現れた。

「さっきのやつらの仲間か……。くそ。こんなにいるとは……」

「仲間を殺ったのは貴様か。楽には死なせぬぞ？」

先頭の男がそう言い刀を構える。少し遅れて後ろに控えていた十を超える男たちもそれに倣う。どいつもこいつもギラギラとした殺気立った目をしていた。

僕たち二人を庇うようにして背に隠し、藤吉郎も刀を抜く。

「晃。おい晃」

「は、はい」

正面の男たちから目を逸らさずに、藤吉郎が背中越しに語りかけてくる。

「ねねを連れて逃げてくれ。頼む」

「藤吉郎様！」

「藤吉郎さん!!」

「藤吉郎でいい。……ひの、ふの、よの、やの、とう、つと。……

さすがにあの人数では勝ち目はねえ。俺が時間を稼ぐからその隙に」

「いやです！　ねねは藤吉郎様の側を離れません！」

そう言つてさつそく魔法の詠唱を始めようとするねね。しかし、それにちらりと視線を向け、また前を向く藤吉郎は言う。

「魔法で一人や二人を倒せても、な。次の詠唱完了までに膾斬りにされちまうぜ。……と、いうわけだ。頼むよ晃。無理矢理にでもねねを引っ張っていつてくれ」

「な、仲間はいないのか？」

僕の問いかけに、力なく首を振る藤吉郎。

「今日は偵察だけのつもりだったんでな。戦闘になるとすりゃねねを連れては来なかったさ。……さあ、時間がない。もし、ねねに万が一の事でもあったら、こんな俺にねねを寄こしてくれた木下家に申し訳立たねえし、何より俺が死んでも死にきれねえ」

……なんてこつた。助かったと思つたのに、またピンチかよ。

「晃さん。私のことは構いませんので逃げてくださいな。ねねは、もう藤吉郎様なしでは生きていきませんので。藤吉郎様がここで果てると言つたら添い遂げとうございます」

……考える。生き残る術を考える。何か、何かないのか……。

出口のない迷路に閉じ込められたように僕の思考が無意味に回る。迫りくる死に怯える体は大量の汗をにじませ、無意識に握り締めたICレコーダーをじつとりと濡らす……。

……ICレコーダー？

「ああつー!!」

見つけた。生還の道。成功するかどうかは知らない。でも何もしないで斬り刻まれるよりは、何倍もましなはずだ！

「ねねさん！ 教えてください！ 魔法の詠唱にはリズムが必要ですか！？」

「り、りずむ！？」

「あああ通じないか！ 韻律！ そう韻律です！ 歌に載せるように唱えないと発動しないとかありませんか！？」

「えっ？ あ、いいえ。必要なのは言の葉を重ねることだけですから……速さも韻律も関係ありません」

「よし！ あともうひとつ！ 魔法の向きを決めるのは！？」

「手、です。発動したい方向に手を向ければ……。でも、それが一体……？」

「それで十分です！ 藤吉郎さん！ ……藤吉郎！」

落ち武者集団と対峙する藤吉郎の肩を掴み、目を合わせる。

「なんだ！ 早く逃げろと」

「うるさいっ！ 聞け！ ……僕も魔法を使えるかもしれない。しかも、ねねさんより早く。だから、ここは二人でいくぞ」

「はあ？ 何言ってるんだお前。さっきまで魔法の存在すら……」

「正直、出来るかどうかはわからない。でも、可能性はある。……信じろ」

睨みあう僕と藤吉郎。……やがてふつと目を逸らしにやりと笑う。

「ま、逃げても逃げ切れるわけでもないしな。……俺の自慢のねねを褒めてくれたお前さんを信じるよ。——いくぞ！」

気合を上げ目の前の男に向けて突進する藤吉郎。油断していたのであろう、刀を構えることもなく立っていた落ち武者の一人を一刀のもとに斬り棄てる。

「てめえ!!」

刀を振り下しきった藤吉郎に別の男が斬りかかる。――今だ!!

カチリ。僕は百倍速にしたICレコーダーの再生ボタンを押す。

キュルン。

その音とともに、男に向けた僕の左手が一瞬で白く光り、魔法の波動を呼び起こす。

轟音とともに発せられたその力は、そいつ一人を叩き伏せたにとどまらず、その背後に立っていた二人の男たちさえもまとめて薙ぎ倒す。

……『先程の『魔道砲』や今の『治癒』などでしたら、言の葉さえ正しく唱えられれば誰にでも使えます。』……。

――ねねさんの言葉が脳裏によみがえる。……『言の葉さえ正しく唱えれば』、その速さはないと言っていた。と、いうことは録音し早送りにした呪文でも魔法は正しく発動するってことだ!

「なっ……?」

驚愕の声は、落ち武者たちからではなく藤吉郎から発せられた。

「藤吉郎! いけるぞ!」

「お、応っ! でえいっ!」

一瞬の停滞を振り切るように、次の獲物へと刃を向ける藤吉郎。

落ち武者たちの中心にいた男が叫ぶ。

「くそっ！ 魔法使いがいたのか！ 奴から仕止める！ 次の呪文を唱えている間に斬り刻んでやるのだ！」

その声に反応した二、三人の男たちがこちらへと殺到する。僕はその殺気に逃げ出したくなる気持ちを無理矢理抑え込み、再び左手を掲げ、右手で再生ボタンを押す。

キュルン。

再びの轟音。重なり合った三人の男たちはその直撃を受け、血反吐を吐いて吹き飛ぶ。

「何だと！？ なぜだ！ なぜ呪文を唱えることなく魔法が発動するのだ！？」

唱えていますよ。呪文。ただし通常の百倍の速度で、しかも唱えているのは僕じゃなく、僕の右手の中にあるICレコーダーが、ですけどね。

心の中でそう答え、僕は三度、手に入れたばかりの魔法を発動する。

——落ち武者たちの中心、指揮を取っているその男に向かって。

「はあ、はあ、はあ……。や、やったな藤吉郎」
「ぜえぜえ……。おうよ、やってやったぜ、晃」

——全ての男たちを斬り棄て、あるいは叩き潰し、ようやく身の安全を確保した俺たち二人は、息も荒く地面に寝転びながら固くお互いの手を取り合った。

「……晃、お前は俺の、俺とねねの命の恩人だ。……俺は本気でお前の話を全部信じる。その上でひとつ提案があるのだが？」

「命の恩人はお互い様だろ？ 気にするな。で、何だ提案って？」

「お前が我が殿に目通りできるように取り図ろう。我が殿はそんなよそこのぼんぼん大名とは訳が違う。懷も器も深く大きい。きつとお前のことを受け入れ、力になってくれるであらうよ」

僕は藤吉郎のその言葉に、寝転んだまま頷く。

「よろしく頼む。……そうか。織田信長に会うのか。田中先生が聞いたら驚くだろうな」

「……信長？ 誰だそれは？」

訝しげに繰り返す藤吉郎。

「お前の主君は、織田信長じゃないのか？」

「確かに俺が仕えているのは織田家だが……。我が殿のお名前は信長などと言つものではないぞ？ それに……」

「信長とは男名であらう。我が殿のお名前は『織田舞奈』様。名前の通り女子じゃ」

第一章 第四部 木下藤吉郎と魔法（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第五部 御前試合

——藤吉郎との出会いから数日後。

僕は尾張国司、織田舞奈様の居城である清州城、その謁見の間にいた。

……藤吉郎は約束を守り、僕を織田家へと紹介してくれた。時間がかかってしまったのは仕方がない。将来の天下人とは言え、この時の藤吉郎はまだまだ織田家においての地位は低いのだ。むしろ重臣でもない藤吉郎が城主である舞奈様との謁見をセッティングしてくれただけでも十分な働きだと言える。

ちなみに僕はこの空いた数日間、藤吉郎の家に泊めてもらい、ねさんから多様多種の魔法を教わって過ごした。攻撃魔法の基礎となる『魔道波』『魔道砲』は元より、治癒魔法、身体強化魔法、防御結界などの聖属性魔法などを、である。

「——緊張するなあ。本当に大丈夫かなあ、藤吉郎」

「ここまできてドタバタするな晃。どーんと構えてるどーんと」
「そうは言ってもなあ……」

謁見の間の隅に藤吉郎と並んで座る僕。その僕を値踏みするように左右の壁際にずらりと並ぶ織田家の重臣たち。この重臣たちというのが、何というか、こう、僕の知っている大人たちとは存在感がまるで違うのだ。……うつつ。居心地が悪い……。

「尾張国主。織田舞奈様。お成りになりました」

ざざつ。そんな衣擦れの音を立て、男たちが一斉に頭を下げる。僕も慌ててそれに倣い、深々と頭を下げる。

「……皆、樂にしろ。今日は突然の参招、御苦勞であつた」

凜とした、若い女性の声が響き、僕は顔を上げる。

上座に胡坐をかけたその人物は、燃えるような赤く長い髪を無造作に後ろでくくり上げ、挑むような目でこちらを睨む。その美貌もさることながら、何よりも周囲の男たちを圧倒するようなその存在感が、織田の当主であると雄弁に語っていた。

「猿。この度の働きは見事であつた。検分役が驚いておつたぞ。よくあの人数に囲まれて無事に帰つてきたものじゃな」

「はつ。それがし一人であれば膺に斬り刻まれていたところでありました。戦功はこの、高久晃にございます。……おい。晃。何をばーつとしている。殿の御前であるぞ」

舞奈様に見惚れ、呆けていた僕は、脇を小突く藤吉郎の言葉に慌てて言う。

「た、高久晃と申します。この度は謁見をお許しくださりまことに……」

「余計な前口上はどうでもよい。その方が猿の言う高久晃か。……のう。猿や。貴様を疑うわけではないのだが、どう見ても戦向けの男とは思えぬのじゃが……?」

舞奈様の疑いの言葉に追従するように重臣の一人が言う。

「まったくじゃ。線も細く武将としての風格も感じられぬ。このよ
うな者が本当に織田家の役に立つというのか?」

そう言いつつ、じろりとこちらを睨む一際迫力のある若い男。

「恐れ多きことながら、勝家様。晃は魔術師であります。線が細い

のは致し方がないところかと」

「ふうむ。魔術を良しとするか。……ならば、おばば。どうじゃ？
その晃とやらの強い力は感じられるか？」

藤吉郎の言葉を受け、今度は上座の近くに控える老婆に言葉を投
げる舞奈様。

「ははっ。……魔術は地に満ちる魔力を使う物。故に術者本人にそ
の力を感じることも出来はしませぬが、この林秀子から見ても、
晃とやらにそれだけの力があるとは……」

「感じられぬか。我が家中一の魔法使いにも否定されたぞ？ どう
する、猿？」

「お、お疑いは尤もでございますが、それがしが命を救われたのは
事実でして……」

……うん。これはだめだな。仕方ない。

汗をかき弁明する藤吉郎の声を聞きつつ、僕はそう思う。自慢で
はないが僕は生粋の文系。体を鍛えたことなど一度もない、そんな
線の細い僕が十を超える男たちの命を奪ったと言うのだ。怪しげ（
時代考証的な意味で、学生服とコートの組み合わせは怪しげと言っ
てもいいだろう）な格好もしている、どこの馬の骨とも知らない男
をいきなり信じろと言う方が無理というものだ。

「まあ、まあ猿。その方がそこまで言うからには、晃とやらに何ら
かのあるのは事実なのであろう。……勝家！」

「はっ」

名前を呼ばれ、先程の迫力ある男が返事をする。……勝家。柴田
勝家か！

「そちに命ずる。晃とやらの腕試しじゃ。立ち会ってみよ」
「御意！」

そう言って一度頭を下げた男がすつと立ち上がり、こちらを見下ろす。

「晃とやら。庭へ出る。猿の言い分が允かどうか、試してくれるわ」

……どうしてこうなった？

数メートル先、木刀を無造作に握り、軽く手足を動かし体をほぐしている勝家を見つつ、僕は自問自答を繰り返す。なんか、すっこい楽しそうなんですけどあの人？

「……晃。晃よ」

僕の隣に立つ藤吉郎が囁く。

「すまん。俺の力不足だ。もう、こうなっては勝家殿を叩き伏せ、お前の力を殿に見せつけるしかない」

「……なあ、藤吉郎。勝家殿って……」

「うん？ 柴田勝家殿だ。我が家中一の豪の者でなあ。お味方としては頼りになることこの上ないのだが……」

「やつぱりか……」

そう言って溜息をつく僕。柴田勝家。歴史好きとは言え、一介の高校生に過ぎなかった僕ですら其の名を知る戦国武将。そんな人と試合とはいえ対峙することになるうとは。

もう一度、勝家のほうを見る。

——筋骨隆々の大男というわけではない。すらりとした体躯は、むしろ敏捷性のほうを強く感じる。が、しかし、素早さだけで戦を

渡っていけるわけもなく、あの引き締まった体にはきつと目一杯の筋肉が詰まっているのだろう。

「これより、柴田勝家、並びに高久晃による御前試合を始める。双方、用意はいいか？」

審判役を務める林秀子が言う。林秀子……そんな武将いたっけかなあ？ ああ、秀子というのはともかく、織田家の家老に林と言う人がいたような気がする。ゲームで見た。現実逃避ぎみにそんなことを考えている僕。

「はじめっ！」

その声に、勝家が木刀を頭上に掲げる。大上段からの打ち下ろしで決めるつもりなのだろう。格下（と思われる僕に）相手に下手な小細工はいらないということだ。

……なんてことは後から理解できたこと。なぜならば。

「せえいつ！」

烈迫の気合とともに、その勝家が凄まじい勢いで踏み込んできたからだ。

数メートルあった距離が一瞬で詰まる。

気がついた時にはその木刀が力強く、今まさに振りおろそうとされていた。

「つつあっ！」

防御本能から反射的に、その木刀を受け止めるように上げられた

僕の左手。迫りくる危険にやはり無意識に反応した懷の中の右手は、それでもしつかりとその機能を果たし。

ばしいっ！

……結果として零距离から放たれた形となった僕の魔法は、勝家の必殺の一撃を籠めた木刀を弾き返すどころか、逆に粉々に砕き散らせていた……。

「そ、それまで！ 勝者 高久晃！」

「つつ！ はあ、はあ、はあ……」

——終わってみれば一瞬の勝負。

激しく動いた訳ではない。というか勝家はともかく、僕自身は左手を上げただけである。しかし勝家の気迫に吞まれかけていた僕は、自分でも信じられないほど緊張していたようだ。試合が終わった途端それが解け、詰めていた息を吐き出す。

「なんと……。あの勝家が一撃で……。しかも木刀を砕く、じゃと……？」

特等席からこの試合を眺めていた舞奈様が、信じられぬ、というように零す。

「魔法の力ならば、その程度は出来るであります。殿、見るべ

きところはそれではありませぬ。勝家の踏み込み、あの駿足の足捌きに合わせて魔法を放った、その詠唱速度こそが凄まじい。恥ずかしながらこのおばば、織田家一を自称するこのおばばの眼を以ってしても、あの男の魔力の発動を感知することが出来ませんでしたわ。舞奈様の言葉に被せるように、秀子とかいう婆さんが言う。

「ぬう……。おばばでもすら、か。全く、信じられぬ……」

……一番信じられないのは、木刀を砕いた魔法の余波を受け、膝をついたこの目の前の男、勝家であろう。必勝の思いはその木刀ごと叩き折られ、茫然と僕を見上げる。が。

「ふふ。ふはははははっ！」

やがて立ち上がった勝家は可笑しくて堪らないといった風に豪快に笑う。

「か、勝家様？」

「いやあ！ 負けじゃ負けじゃ完敗じゃあ！ ここまで完膚なきまでにやられれば、もういつそ心地よいほどじゃ！ 晁とやら！ この勝家、感服したぞ！」

そう言っ僕を肩をばんばんと力任せに叩く勝家。

「あ、いやその……」

その勝負前とはうって変わった親しげな態度に戸惑う僕。と、いうか痛いですが肩が。

「ぬう？ 何じゃ何じゃその顔は！ この勝家に勝った男がそんな表情をするな！ 胸を張らんか！ ……おい！ 猿よ！」

「はっ！」

「どこで拾ってきたかは知らぬが、また凄い男を見つけてきたものだな！ 褒めてつかわすぞ！ 落ち武者崩れの山賊どもを討ったことなんぞより、この男を連れてきたことのほうがお前の手柄じゃ！」

「ははっ！」

平伏する藤吉郎が、こっそりとこちらに目線を送りにやりと笑う。

「殿！ 不甲斐ない姿をお見せして申し訳ござらぬ！ しかしこの晃とやらの力は本物ですぞ！ それは勝家が保証致します」

「あいわかった！ 猿！ それに晃とやら！ 部屋へ参れ。ゆつくりと話を聞かせてもらおうぞ！ ……諸将はこれにて解散！ 勝家も御苦労であつた！」

——勝家の推挙に応えた舞奈様の言葉により、この一幕は終わりを告げた。

「……なるほどの。つまり晃は違う世界の、しかも未来から来たということか」

「そう考えれば辻褄が合うのです。……少なくとも僕のいた世界では、この時代に魔法があつたとは聞いたことがありませんし、織田家の当主も舞奈様ではありませんでした」

——舞奈様の私室なのであろう。やや雑然とした部屋で面談は続いた。

ちなみに付いてきた藤吉郎は部屋の前で待機させられている。万が一、僕が敵方の刺客であつた時の為の備えなのだろう。

「しかし、何といったか。信長か？ そのような者が我が係累にいたかのう？」

「信長というのは元服後の名前であつたと記憶します。幼名は確か

……吉、吉、吉法師だったかなあ……」

「何と！ 吉法師兄者か！」

驚いたように繰り返す舞奈様。

「ご存知でしたか？」

「ご存知も何も、本来、この家を継ぐと言われていた嫡子じゃ。うつけものと呼ばれてはいたが、この我には優しい兄であった。……」

『閻魔火炎地獄』を修めることが出来ずに廃嫡となってしまうわたが、の」

「え、『閻魔火炎地獄』？ 何ですかそれは？」

「当家に伝わる固有魔法じゃ。……織田に限らず、大名家には大抵、各家秘蔵の大魔法があるのじゃが、その習得がまた困難でな。困難と言うか、あれは魔法のほうが使い手を選ぶようなもの。故に、どれほどの豪勇を誇ろうが知略に満ち溢れようが、その魔法に選ばれなければ、棟梁となることは適わぬ」

「なるほど……」

無意識に相槌を打った僕に、にやりと笑いかけ舞奈様は続ける。

「そうでもなければ、この異国の血が混じった我などが織田家を束ねることなど不可能であつたろうよ。姉上であるお市の方もお犬の方もそれは素晴らしい人物であつたが、やはりこの魔法を修めることのみは残念ながらできなんだのじゃ」

「ああ。その髪の色はやはり……」

「そうじゃ。我は父上が異国のものに手を出し生まれてきた。本来であれば棟梁どころか、この城に入ることも叶わぬような身分であつた」

そう言つて煩わしげに赤い髪をかき上げる舞奈様。

「なるほど。……ところで、その吉法師様は今どちらへ？」

「わからぬ。魔法の習得に失敗した兄者は寺に預けられたとは聞い

たが、そこを出奔し、その後の行方までは我も知らない」

首を振る舞奈様。その目はやや遠くを見ているようで、もしかしたら優しくったという吉法師、信長を偲んでいるのかもしれない。

「話が逸れたな。しかして昇。今後どうするつもりじゃ？」

その言葉に居住まいを正す僕。

「今の僕には二つの目的があります。そのための織田家の力をお貸し願いたいのです。もちろん対価はお支払いします」

「目的と対価……とな。まずは目的のほうから聞こうか」

舞奈様の促しに頷き、僕ははっきりと言う。何しろ今日はこのためにここへ来たのだ。ここでしくじるわけにはいかない。

「まず一つ目。それは元の世界に返ること。方法も手段もわからない、まるで霞を掴むような話ではありますが、来た以上帰ることも出来るはずだと信じます」

「当然の願いじゃな。……してもう一つは？」

「実は僕は、一人でここに来たわけではありません。知人と共にいた所を、この世界に飛ばされました。……その知人、僕にとっては何よりも大事なその人を探したいと思います。そのために、織田家の持つ情報網が必要なのです」

「なるほど……」

僕の言葉を吟味するようにして聞く舞奈様。

「その方法論はこの際置いておこう。しかし、その方の言い分を聞けば、我が家中にもそれなりの負担があると思われる。それに見合った対価とはなんじゃ？」

「まずひとつ。僕のこの魔法の力を舞奈様の覇業に役立ててください。とは言っても、戦場へ出ると言うのではなく、領内の保護、先

日退治した山賊どものような輩を討つのに使って頂きたいのです」
「お主の腕は見せてもらった。その任に就けば十分な働きをするであろう。が、しかし、なぜ戦場を否定する？ 功を立てるのであればむしろ戦場こそが其の場としてふさわしいと思うのじゃが？」

……その質問は来ると思っていた。なので用意していた答えを返す。

「それは僕がこの世界のものではないからです。異界の者がこの世界の歴史を動かしかねない戦場にて大きな働きをすること、それを僕は恐れています」

「一理ある……。が、しかし、それは盗賊退治も同じことではないか？」

「大か小かの違いという自覚はありますが、出来ることならば僕がいると言う影響力を少しでも小さくしたいのです。実際のところ、僕がお支払いできる対価としては僕自身の能力くらいしかないというのも事実ですしね」

「なるほど、の」

ここまでの舞奈様の反応は僕の予想を大きくは外れていない。
ここで勝負をかける。

「対価としてもうひとつ。舞奈様にお見せしたい物があります」

「ほう？ なんじゃ？」

「こちらでございます」

。そう言つて僕は鞆から一冊の本を取り出す。その正体は『地図帳』

大して興味なさそうに二、三ページを捲っていた舞奈様の顔色が変わる。

「おい！ 晃！ これは！？」
やはり喰いついた！

「この日本全国の詳細な地図です。……もちろん未来のものですから記載されている建物や道路などは今のものとは異なります。しかし、地形や高度は正確な物のはずです。……どうでしょう？ 舞奈様であればこの価値、わかって頂けると思いますが……」

「価値も何も……。それが誠であるならば、これは一城どころか一国にも匹敵する価値のある情報であるわ……。むう。察するにこの『等高線』とやらが高さを指し示しているのじゃな。……なんと言ったらよいのか……」

「僕に手を貸して頂けるのであれば、それを差し上げましょう」
「誠かつ！」

勢い込んで舞奈様が乗り出してくる。……この賭け、僕の勝ちだ。

……たかが地図帳程度、と思うかもしれない。

しかし、この日本に正確な全国地図が出来たのは、実に今から百年以上たった後、伊能忠敬によって初めて成されたことなのである。大名ともなれば、戦にしろ祭りごとにしる、正確な情報を欲することは無理もない。特に異国へ攻め入ろうとする戦国大名ともなれば尚更だ。

そう考え、鞆の中に偶然持っていた地図帳を献上しようと思いついたのは、実に昨日の夜のことだった。結果は、もう見るまでもないな。

「あいわかった！ お主に協力しよう！ いっそ家中に入ればどうじゃ？ いやむしろその方がお互いの為になると思うのじゃが？」
「申し出には感謝致しますが、それは何とぞ御容赦ください」
「なぜじゃ？ 我には仕える程の魅力をお感じぬとでも申すか？」

いきなり不機嫌になりかけた舞奈様に、慌てて首を振り否定する。

「そうではありません！ 僕は『帰ること』を前提とした身。家中に入るということは部下を抱えその責任を持つということだと考えます。僕はそれを成すことはできませんから」

「む……。言われてみればその通りではあるが……」

「舞奈様個人へは忠誠を誓いますから！」

「……わかった。その辺で妥協するでしょう。しかし、我は執念深いからの。この先も何か事がある度に口説くとするわ」

……そう言つてにやりと敵に笑う舞奈様であつた。

「——と、まあそういう訳で僕はここにいるんだ」

……長い長い僕の話が終わつた。

話し始めた時はまだ中天にあつた太陽はいつしか西に傾き、椿さんの横顔を照らす。

「悪かつたね。長話しちゃって」

「と、とんでもないです。こちらこそすいません。真剣に聞いていたつもりですけど、所々わからないことがあつて……」

そりゃそうだろう。当事者である僕ですら混乱しているのだから。

「でも、ですね。ひとつだけ、椿にもわかることがあります」

「うん？ 何だろう？」

「高久様がこの世界に来てくれてよかった、ということですよ。……私の住む窪田の村は国境にあるのでよく領主様が変わるんです。時に織田様、時に今川様……といった風に。でも、最近はずっと織田様の領内にあるおかげで、椿たちは平和に暮らせています。税も安くなりましたし、お父さんを兵役に取られることもなくなりました」

「そっぴや織田家は戦国大名の中ではいち早く、士農分離の政策を取った国だっけな。」

「そりゃよかった。でも、それは織田家の功績だよな？ どうして僕が？」

「その織田家を護っているのが高久様なのでしょう？ 高久様のおかげで織田家が安泰で、そのおかげで椿たちの生活が守られる。……ほら、やっぱり高久様がいてくれてよかった」

「そう言ってにつこりと笑ってくれる椿さん。」

「その表情には何の衒いもなく、心からの言葉だと知れる。」

「……参ったな。そんな風に言われるとは思っていなかったよ」

「椿は嘘は申しません。……高久様。これからも織田家の皆様と椿たちのことをよろしくお願いします。椿は織田様と高久様を信じていますからね」

「僕がこの世界にいる限り、精一杯努めるよ。ありがとう。椿さん。……さて、すっかり遅くなってしまった。滝川様の御屋敷まで送るよ」

「そう言って歩き始めた僕の、ほんの少し後ろをついてくる椿さん。礼を言うのはこちらのほうだと思った。なぜならば、誰かに自分

のことを話すという、たったそれだけの行為で、こんなにも気持ち
が軽くなったのだから。

出来ることならば。

この国に住まう皆を護りたいと、そう思うことが出来たから。

——赤い夕陽に照らされたこの笑顔を護りたいと、心から思うこと
が出来たから。

第一章 第六部 今川家侵攻

……凶報は深夜に届いた。

椿さんとの出会いから数日たったあくる日の深夜、僕はお世話になっている木下家の戸を叩く音によって目覚めた。

どろどろん！

部屋を出ると、やはりこの音によって起こされたのであろう、眠そうな藤吉郎がいた。

「藤吉郎。一体何事だ？」

「さあ。俺にもわからん。とにかく戸を開けるとしよう」

がたがたと立てつけの悪い戸を開ける藤吉郎。外にいたのは……
滝川さん？

「こんな時間にすまない。藤吉郎。火急の用ゆえ、この無礼は見逃してほしい」

「た、滝川殿？ どうなされたので？」

「うむ。……今川が動いた。既に丸根砦、鷲津砦は三河勢に包囲され、今川本隊も沓掛の城を出陣。中島や窪田の村々を焼き討ちにしつつ織田領内を侵攻中じゃ」

「なんと！ ついに今川が……」

「ついでには藤吉郎は元より、高久殿にも御出陣頂こうと思ひ立ちこ

のような時間に」

「ちよつと待つてください滝川さん！　今、窪田の村って言いましてか！？」

滝川さんの言葉を遮るようにして叫ぶ。窪田の村ってまさか……？
僕の質問に対し、苦虫を噛みしめるようにして答えを返す滝川さん。

「……さようござる。先日あの娘、椿たちが住む村でござる……」

「あつ！　お、おい！　晃っ！」

僕は滝川さんの言葉も藤吉郎の言葉も最後まで聞くことなく走りだす。

部屋にとつて帰りICレコーダーを忍ばせたコートを羽織ると、そのまま呆然とする二人を置き去りにし飛行魔法で空に飛び立った。

……自分が窪田の村の場所を知らないことは、空に飛び立ってから気がついた。が、それは致命的なミスにはならなかった。なぜならば、高く上空に上がれば、遙か遠く、清州の城下町からでも見えてしまったからである。……赤々と燃える、窪田の村が。

降り立った窪田の村。

そこにはまさに地獄と呼ぶに相応しい光景が広がっていた。

進軍してきた今川の兵が散々狼藉を働いたのであろう。家という家

には火を放たれ、碌に抵抗する術も持たない村人たちはそここに無残な死体となって転がっており、事切れた父にすがって泣く子、物言わぬ血塗れの娘を抱きしめ涙する親、そんな見るに堪えない光景があちこちで繰り広げられていた。

「椿さん！ 無事ですか！ 椿さん！」

僕は声を枯らし叫ぶ。どんな囁く声も逃すまいと、魔法で五感を強化する。

そのせいで濃密な血の臭いにむせ返りつつも、椿さんを探すことをやめない。

「た、高久……様？」

だからこそ、そのか細い、ややもすれば風の音にも消されてしまうような、小さな小さな椿さんの囁くような声を聞き取ることが出来た。僕は声の聞こえた方向へ走る。

「椿さん！ よかった無事だったんだね！ 椿さ……ん」

……ああ。酷い。酷過ぎる。

道端にうつ伏せに倒れていた椿さんを抱きかかえた僕の手に、ぬるりとした感触があった。それは椿さんから流れ出た生命の証であり、その流出元の傷口は素人目にも無惨で、どうあっても手の施しようがないということが一目でわかる。

—— 治癒魔法と言うのは怪我を修復し生命力を注ぐ魔法。よって、その怪我が致命傷で、流れ出る生命力の量が魔法によって補われる量を上回ってしまえば、その命を救うことは出来ない。魔法は万能ではないのだ。

だから、目の前の少女の腹部に開いた大きな穴を埋めることは、魔法でも不可能で。

僕は、成す術もなく、抱きしめたその手に力を込めるしか出来なくて。

「あ……ああ。高久様が来てくれました。もう……安心……です、ね」

そんな酷い怪我にも拘らず、僕の顔を見てにつこりと笑ってくれる椿さん。

「黙って！ 今、治癒魔法をかけるから！ 大丈夫！ こんなのすぐ治る！」

誰よりも僕自身が無駄だとわかっている。でも何かをせずにはいられない。

「だ、だいじょうぶ、です、よ。椿は……頑丈です、から、ね」
「もういい！ もういいから！ お願いだから！」

「そ、それよりも高久、様？ あ、あちらにもっと多くの、怪我人が、います。そちらへ、そちらを、お願い、します……」

どうして？ なぜこの子はこんな目にあっても他人のことを心配できるんだ？

「ここは、椿の、村ですから。生まれ育った……大事な、だい、じな」

「椿さん……椿さん……！」

僕にはもう、この健気な子の名前を呼び、抱きしめることしかできない。

「た、高久様は、相変わらず、の、黒装束、なの……ですね。夜にま、まぎれ、て、お姿が、お顔も、見え……ませぬ」

そう言って弱々しく手を上げる椿さん。僕はその手を取り自分の顔に押し付ける。

「……ここにいるよ。椿さん。もう、安心だから」

「はい……。お、お団子、おいしかった、です……ね」

「ああ。元気になったら、また食べに行こうね」

「はい……約束……です、よ？」

「……平和に、なったら、い、戦のない、世になった、ら、また、高久様といっしょに、お団子を……」

——弱々しくも上げられた椿さんの手がすつと落ち、その短い命を、終えた。

「……………いまがわああ……!!!!」

僕は月夜に向かつて吠える。

助けられなかった少女を思い。

少女の命を奪った怨敵の名前を叫ぶ。

必ずやこの報いを受けさせてやると心に誓いつつ。

「……籠城……」

「いや……先手を打ち奇襲……」

そんな声が漏れ聞こえてくる清州城大広間の襖を、僕は音高く開け放つ。

「晃殿……？」

「おい晃！ どこへ行つて……」

ずかずかと大広間を歩き始めた僕に問い掛けてくる藤吉郎や重臣たちの言葉は、僕の表情を見ると霞のように消えてしまう。そんな周囲を一切顧みることなく、僕は上座にいる織田舞奈様の前に跪く。

「晃、か」

「遅くなりました。織田様」

「うむ……。おい、なんだその顔は」

「表情が強張っているのは、織田様のせいではありませんから気にしないでください」

「ちがうわ馬鹿もの」

そう言つて懷から手拭いを出す舞奈様。そのまま僕の顔を拭く。

「ほれ。血じゃ。何があつた？」

「……窪田の村へ行っていました」

「ほう」

「村人たちのほとんどは既に惨殺されていました」

「そうか……」

「この、僕についている血は、その村の、一人の娘のものです。…

…彼女は以前、言っていました。織田様のおかげで平和に暮らせる、と。……織田様。ひとつ答えてください」

…… 大国今川の侵攻と言う大事の前に、喧々諤々の議論を繰り広げていたはずの織田家の重臣たちは、僕と舞奈様のやり取りを、今は息を飲むようにして見守っている。

「あなたは、この先、領民を護れますか？ この地に住む全ての者が笑って暮らせるような、そんな世界を作りたいと思いますか？」
「愚問じゃな。我に力があれば、とうの昔にそうしている。だがの、今の我の力では領民全てを護ることなど、夢のまた夢じゃ。…… 齒がゆいことに、な」

だん！

八つ当たりのように床に拳を叩きつける舞奈様。
そんな舞奈様に重ねて問い掛ける僕。

「力があれば、あなたはそれを実現したいと、本当にそう思われま
すか？」

「…… 出来もせぬことは口に載せたくはない。我には力が足りない
のじゃ」

僕は立ちあがる。驚く舞奈様を見下ろし、怒りを叩きつけるよう
に叫ぶ。

「出来るか出来ないかなんてこの際置いておけ！！ 僕は、織田様
…… 舞奈様！ あなたの気持ちを、理想を聞いているんだ！ 領民

は舞奈様に期待している！ 平和な暮らしをもたらしてくれると信じている！ その気持ちに応える気があるのかないのか！？ 答えてください！ 舞奈様！！」

僕の気迫に吞まれるように静まり返った大広間。

最初に口を開いた、というか叫んだのはおば様こと、林様であった。

「こ、こやつ！ 雇われ者の身分の癖に殿のお名前を呼ぶなど、何て恐れ多い！」

「おばば。よい。黙れ」

「しかし、殿……」

「よいのだ。…… 晁。答えよう。我は、我の領民全てを護りたいとそう思っておる。我はそのために、この日の本を統一しようと考えている。そして戦の無い世の中を作りたい。…… 農民が作物を作り、商人は物を売り、親は子を愛し、子は親を敬う。そんな当たり前のことが当たり前にある、そんな世の中を作りたいと、そう願う。それが我の理想じゃ」

撫で斬りにされても文句は言えない、そんな僕の啖呵を真正面から受け止め、まっすぐこちらを見て、そう言いきった舞奈様。

「その言葉、信じてもいいのですね？」

「織田家の家紋にかけて誓おう」

僕は再び跪き、深々と頭を下げる。

「舞奈様。本日只今より、この僕はあなたの理想実現のために戦場に出ましよう。僕があなたの力となりましよう。まずは今川との一

戦。僕が必ず舞奈様を勝たせて見せます。……だから、舞奈様。先程の言葉、その理想、必ず、必ず実現してください。お願いします」

そう言いつつ、さらに深く頭を下げた僕。

……だから、この時の舞奈様の表情は見えていない。でも。僕の言葉が舞奈様に届いたことは、次の舞奈様の行動でよくわかった。

「……おばば。鼓を持て」

「はっ？」

「ひとさし舞うぞ。『敦盛』じゃ」

人間五十年

下天のうちをくらぶれば

夢幻のごとくなり

……軍議の最中に突如乱入してきた僕。その無礼な態度に腹を立てるでもなく、『敦盛』を舞う舞奈様。そのあまりの展開の速さに重臣たちはすっかり呆けてしまっている。

それは無理もないことだ。この舞いの意味は僕だけがわかる。

つまり、舞奈様は覚悟を決めたのだ。天下を取るといふ、壮大な覚悟を。

——やがて舞いを終えた舞奈様が音高く扇子を投げ捨て、僕を見る。

「晃！」

「はい！……まずは熱田神社へ！そして善照寺へ！時間がありません。全軍でなくてもいい。今すぐ動ける者を一刻も早く熱田神社へ集めてください！」

……田中先生の雑談はここでも役に立った。桶狭間前の織田軍の集合地なんて、普通の高校生は知らない。もう田中先生に足向けて寝れないな。

「あいわかった！して、その後は？」

「全軍を以って今川の陣へ奇襲をかけます！その地は……桶狭間！」

「よし。……馬を引け！織田舞奈、出るぞ！ついて来れる者はついてこい！……それから晃よ！」

「はい！」

「お主、まだ馬に乗れぬのであろう？我の後ろへ乗れ」

「えええっ！いや僕は空を飛んで……」

「うるさい黙れつべこべ言うな。お前と我は最早一蓮托生。諦めろ！」

「いや！待って、待ってください！ちょっと舞奈様引つ張らないで！」

……五月十九日未明。織田舞奈は清州城を出る。

僕は、運命から逃げ出すことをやめ、それに逆らうことに決めた。

——十九日昼前。善照寺砦。

「……で、織田様。結局何名くらいの兵が集まりましたか？」

「……………」

「織田様？ 聞いてます？」

「聞こえぬわ」

「聞こえてるじゃないですか」

「……………舞奈、じゃ」

「はっ？」

「舞奈じゃと言っておろう？ 我はもう晃には舞奈と呼ばれぬ限り返事はしないと決めたのじゃ」

そう言つてそっぽを向く舞奈様。何だこの人この非常時に！ 子供か！

「な、何を言つてるんですか！ 織田家の棟梁の下の名前を呼ぶなんて出来ませんよ！」

「したではないか。ついさっき。清州城で」

「あ、あれは勢いというか何というか……………」

ああもう面倒くさい。時間がないというのに！

「……………舞奈様。兵はいかほど集まりましたか？」

「ざつと二千と言つところじゃの。織田家全軍の約半数じゃ」

澄ました顔で素直に応える舞奈様。ちょっとだけ殴ってやろうかと思う。

「わかりました。ではすいませんが、皆を集めてください。ここで軍議を開きます」

……………集合した諸将を前に僕は言う。

「……ここまできたら作戦も何もありません。今川義乃とその兵は桶狭間にいます。その数、ざっと六千。そこに雨にまぎれて奇襲をかける、それだけです」

「まで、晃。その方に乗せられてここまできたが、その話は本当なのだろうな？ 物見の報告によれば、今川の軍は二万を超えていたと聞いたぞ？」

そう言ってきたのは勝家。

「さらに言わせてもらえば、雨、じゃと？ そうそう都合よく雨なと降るものか」

「雨は振ります。そして今川の本陣には多くても六千。もしかしたらそれ以下の兵しかいないということも確かです。……これは信じてもらうしかありません」

未来から来たから知ってるんです……とはさすがに言えない。

「勝家。お主の心配も尤もじゃが、我はもう、晃を信じると決めたのじゃ。もしもその言葉に嘘があれば、我が責任を以って晃を斬り捨てる。そして単身、今川の陣へ突っ込んでやるわ」

「と、殿！？」

驚く勝家に、舞奈様は優しい目を向ける。

「どちらにしろこの戦、晃の言うとおり雨が降り、今川本陣に六千の兵しかおらぬという前提のもとにしか勝機などないわ。そうであれば腹を括った方が得じゃろ？」

そう言うてにやりと笑う舞奈様。

「なるほど。仰るとおりでござる。……おい晃。この勝家の命、そなたに預けた」

……なんとか収まったか。

「最後にひとつ。舞奈様。教えて頂きたいことが」

「なんじゃ晃？」

「今川家の固有魔法とはどういったものですか？」

「今川のあれは、我のものととは全くの別物じゃ。我の『閻魔火炎地獄』は詠唱こそ長くかかるがその威力はこの日の本でも最高の物だと自負しておる。しかし、今川のは、そもそも魔法と呼べるものなのかどうかもわからん」

「と、いうと？」

「今川家の魔法と言うのはじゃな、化け物を捕え、それを使役する物なのじゃ。捕える時にこそ時間がかかっているのであるが、呼び出すのは言葉一つじゃ。……よって、今川義乃と我が魔法を打ち合うということになれば、我に勝ち目はなかるうよ」

「なるほど……。それを聞いて安心しました」

「安心？ 安心じゃと？」

「ええ。安心です。今川義乃。こいつの首は僕が獲ります。これは舞奈様にも譲れません。……やつは許されないことをした。織田家の護り神たる僕の、大事な友人や多数の領民の命を奪った。命には命で償ってもらいましょう。今川義乃は僕が討ちます」

カッ！

一筋の雷が天を斬り裂き地に落ちる。その光の剣は、実は空を割ったのかもしれない。

突如として、痛いほどの豪雨が降り注いできた。僕の知っている歴史の通りに。

「……さあ、舞奈様。織田家家中の皆さん。この雨が我らの接近を今川の陣から隠してくれます。天は我らの味方です。……行くようにしましょう。天下取りの第一歩を！ いざ！ 桶狭間へー！」

——僕の叫びに織田家二千の兵の鯨波の声が続いた。

第一章 第六部 今川家侵攻（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600z/>

戦国の魔術師

2011年12月2日23時03分発行